

東日本大震災・原子力災害伝承館

The Great East Japan Earthquake and Nuclear Disaster Memorial Museum

令和4年度 年次報告書



館長挨拶



東日本大震災・原子力災害伝承館は、2011年の東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故という未曾有の複合災害の記録と記憶を防災、減災の教訓として国内外に発信し、未来につなぐことを目的として、2020年（令和2年）9月に開館しました。ありがたいことに来館者は年々着実に増加しており、令和3年度の入館者が58,271人だったのに対して、令和4年度は80,129人と、前年度に比較して21,858人（37.5%）の増加となりました。このように多くの方にお越しいただいているのも、伝承館のスタッフの努力に加えて、関係者の皆様の継続的なご支援の賜物であると、改めて感謝申し上げます。

令和4年度は、企画展示として「地震と津波のメカニズム」と「地図と写真で見る東日本大震災」を行いました。一つのテーマを掘り下げる形の企画展示はおおむね高評価をいただいております。今後も継続して行っていきたくと考えています。また伝承館では県内外での出張展示を行っており、令和4年度はコミュタン福島や東京都の文京シビックセンター等での出張展示を行いました。今後は海外での出張展示も視野に入れながら、伝承館の知名度アップを図っていきたくと考えています。

さらに令和4年4月からは、4名の常任研究員が着任し、上級研究員の指導の下、研究機能の強化が図られています。すでに学会発表や論文執筆によってそれぞれの研究成果が着々と公表されており、今後のさらなる発展が期待されるところです。研究事業を通じて、将来的には伝承館が国内外の防災・減災に資するエビデンスを創出し、またそのような活動を通じた専門家の育成を図ることができるようにしていきたいと考えています。

コロナ禍がひと段落したということもあり、今後は海外からも多くの方が来館することが予想されます。伝承館を世界中の方が複合災害の教訓を学び、復興の大切さを学ぶことができる場とすべく、スタッフ一同、今後もさらなる努力を続けていきたいと考えています。

令和6年3月

東日本大震災・原子力災害伝承館長 高村 昇

東日本大震災・原子力災害伝承館の “基本理念”と“基本理念に基づいた4事業の実施”

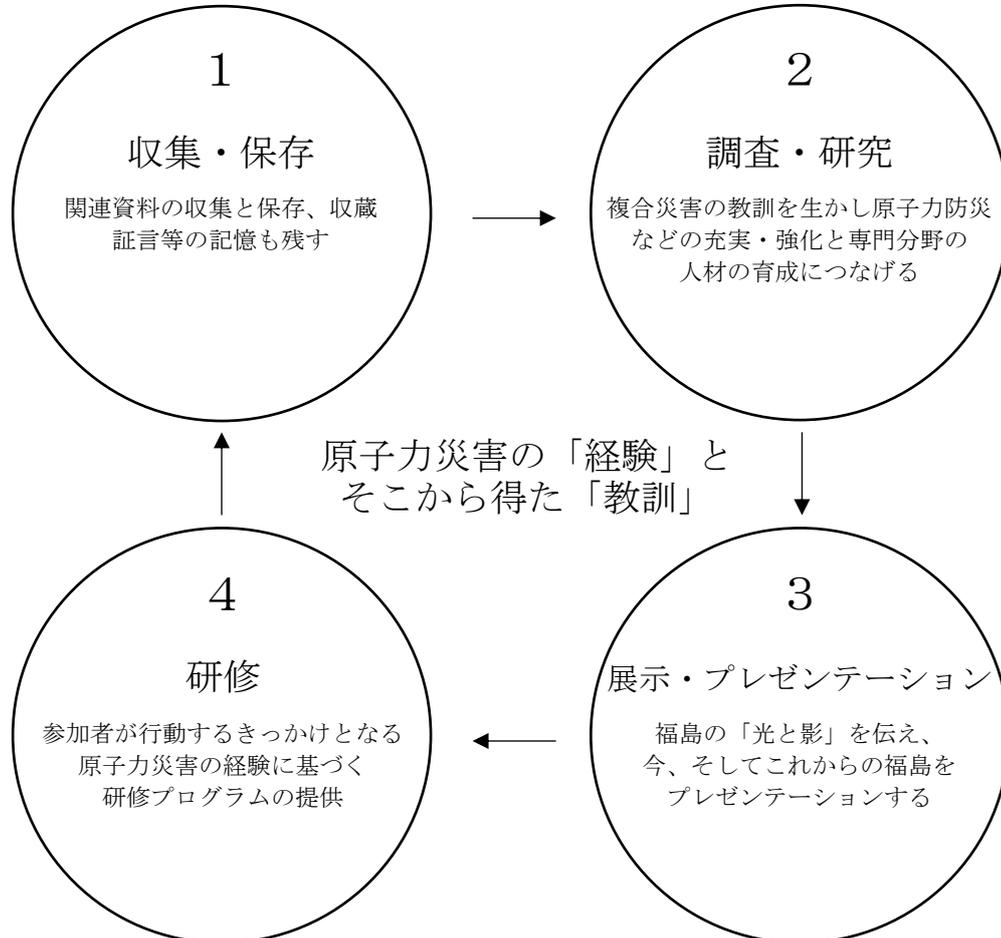
基本理念

世界初の甚大な複合災害の記録や教訓とそこから着実に復興する過程を収集・保存・研究し、風化させず後世に継承・発信し世界と共有することは被災した人々の共通の願いである。

東日本大震災・原子力災害伝承館では、特に福島だけが経験した原子力災害をしっかりと伝えるために、次の3つの基本理念を掲げる。

1	原子力災害と復興の記録や教訓の 未来への継承・世界との共有
2	福島にしかない経験や教訓を生かす 防災・減災
3	福島に心を寄せる人々や団体と連携し、 地域コミュニティや文化・伝統の再生、復興を担う人材の育成等による 復興の加速化への寄与

基本理念に基づいた4事業の実施



施設概要

1. 施設の概要

設置者	福島県
管理運営	公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構が福島県から指定管理者として指定を受け、施設の管理運営を行っています。
施設の設置場所	〒979-1401 福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39
開館日	令和2年9月20日
開館時間	午前9時から午後5時（午後4時30分最終入館）
休館日	火曜日（火曜祝日の場合は翌平日）・年末年始（12/29～1/3）
入館料	大人：600円、小中高：300円、未就学児：無料 大人団体（20名以上）：480円、小中高団体（20名以上）：240円
延べ床面積	延床面積 5,256.56㎡ （1F：約2,675㎡、2F：約2,385㎡、3F：約195㎡）
構造・規模	地上3階、鉄筋コンクリート構造（一部鉄骨造）
駐車場利用可能台数	大型バス：10台、普通車：111台

2. 設置目的

地方自治法第244条第1項の規定に基づき、東日本大震災における甚大な災害に見舞われた福島県の記録、教訓及び復興のあゆみを着実に進める過程を収集、保存及び研究し、決して風化させることなく後世に引き継ぎ、国内外と共有するとともに、福島イノベーション・コースト構想の推進及び本県の復興の加速化に寄与するため、東日本大震災・原子力災害伝承館を設置する。（東日本大震災・原子力災害伝承館条例第1条）

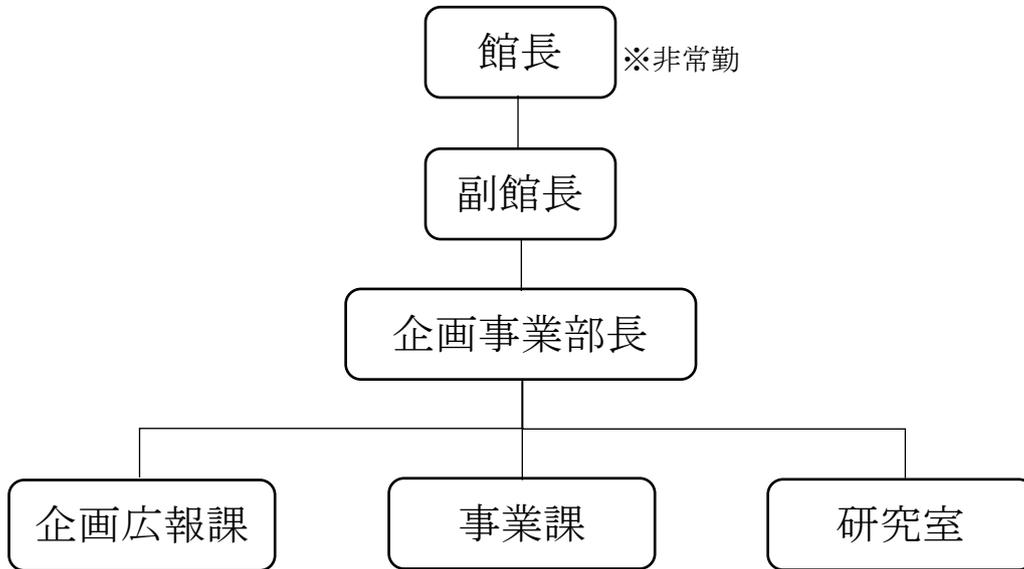
3. 施設沿革

平成27年3月31日	国の「イノベーション・コースト構想個別検討会」の中間整理において、福島県でのアーカイブ拠点に関する研究会の立ち上げを指示
平成27年4月～8月	福島県において「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設有識者会議」を設置、当該会議を5回開催〔施設の必要性の有無を検討〕
平成27年9月	本有識者会議において報告書をまとめ、福島県知事へ提出
平成28年6月～12月	福島県において「拠点施設基本構想策定に係る検討会議(4回)」を実施〔施設の具体的な規模や機能、立地場所等を検討〕
平成29年3月27日	福島県の「新生ふくしま復興推進本部会議」において「拠点施設基本構想」を決定〔立地場所や基本理念、展示ストーリー等〕
平成30年4月25日	福島復興特措法に基づく「重点推進計画」に認定〔施設の管理運営は、指定管理者制度に基づく福島イノベ機構での運営を検討すると明記〕
令和2年9月20日	東日本大震災・原子力災害伝承館 開館

4. 組織体制

令和5年3月31日現在、東日本大震災・原子力災害伝承館の構成員は、以下のとおり館長、副館長、企画事業部長、研究室及び各課の構成員を合わせた29名である。

また、受付は、外部委託のスタッフで運営している。



企画広報課		事業課		研究室	
課長代理（誘客）	1名	課長	1名	上級研究員	3名※非常勤
課員	3名	課長代理	1名	常任研究員	4名
		課員	13名 (うちアテンダント6名)		
			※非常勤1名		

東日本大震災・原子力災害伝承館 年次報告書 目次

- ・館長挨拶
- ・東日本大震災・原子力災害伝承館の“基本理念”と“基本理念に基づいた4事業の実施”
- ・施設概要

1章 利用者状況	1
1節 来館者数	2
2節 学校団体来館者数	3
3節 来館者アンケートの概要	4
4節 V I P等の視察対応	6
2章 展示	9
1節 常設展示	10
2節 企画展示	13
3節 出張展示	14
4節 エントランス展示	16
3章 資料収集・保存	25
1節 資料収集・保存・収蔵	26
2節 資料閲覧室	29
4章 語り部	31
1節 館内語り部講話	32
2節 館外での語り部講話、交流	33
5章 研修	35
1節 一般研修	36
2節 専門研修	37
6章 調査・研究	39
1節 概要	40
2節 常任研究員の取組	41
3節 報告会等	52
4節 福島国際研究教育機構（F-REI）との連携	54
5節 その他	54
7章 イベント・広報	55
1節 イベント	56
2節 広報	59
8章 東日本大震災・原子力災害伝承館の 運営に関する有識者懇談会	61
1節 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会	62
9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に 関連した新聞記事	63
《付録》 令和2・3年度 事業実績	付録-1
令和2年度	付録-2
令和3年度	付録-7

1 章 利用者状況

1節 来館者数

来館者数の推移

令和2年(2020)年 9月20日 東日本大震災・原子力災害伝承館 開館

令和3年(2021)年 5月 3日 累計来館者 5万人到達

令和4年(2022)年 3月14日 累計来館者10万人到達

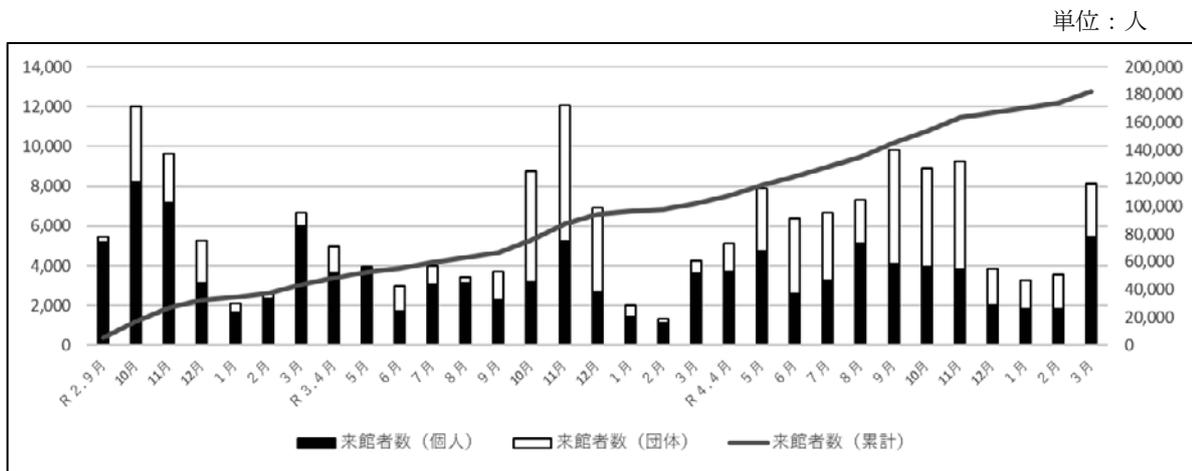
令和4年(2022)年10月19日 累計来館者15万人到達

開館日

令和4年度：304日

令和3年度：302日

令和2年度：159日



令和4年度月別来館者数

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
個人	3,698	4,740	2,605	3,273	5,093	4,083	3,959	3,793	2,012	1,816	1,804	5,470
団体	1,435	3,161	3,771	3,389	2,197	5,755	4,966	5,430	1,819	1,448	1,769	2,633
合計	5,133	7,901	6,376	6,662	7,290	9,838	8,925	9,223	3,831	3,264	3,573	8,103

令和3年度月別来館者数

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
個人	3,635	3,831	1,728	3,073	3,117	2,317	3,198	5,209	2,680	1,418	1,148	3,624
団体	1,351	108	1,232	919	276	1,377	5,562	6,858	4,231	608	167	604
合計	4,986	3,939	2,960	3,992	3,393	3,694	8,760	12,067	6,911	2,026	1,315	4,228

令和2年度月別来館者数

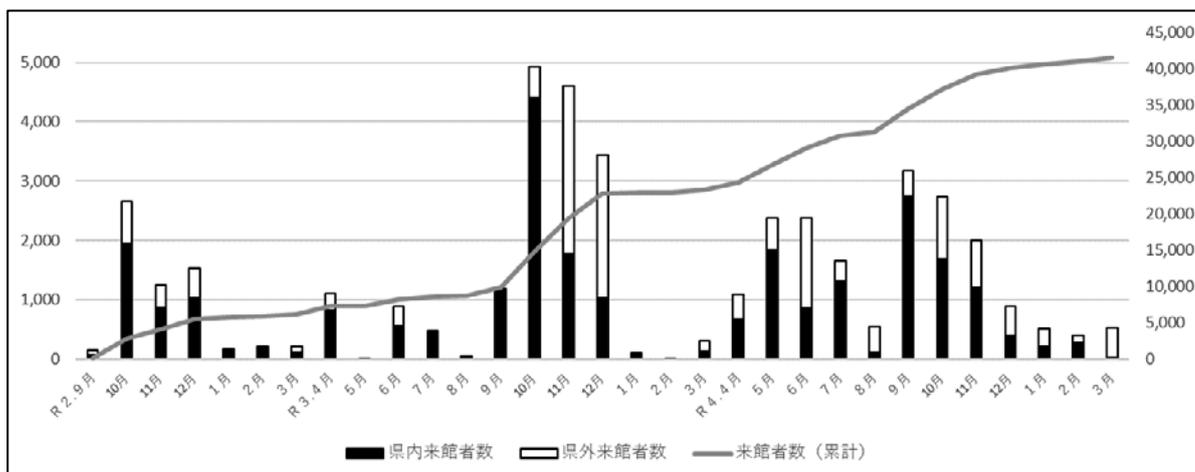
単位：人

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
個人	5,154	8,211	7,132	3,107	1,678	2,370	6,001
団体	277	3,798	2,497	2,170	410	254	691
合計	5,431	12,009	9,629	5,277	2,088	2,624	6,692

2節 学校団体来館者数

学校団体数及び学校団体来館者数

単位：人



令和4年度月別学校団体数及び学校団体来館者数

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校団体数	12	26	33	33	20	57	42	29	24	11	10	16
県内	6	21	21	24	7	47	26	13	12	6	6	2
県外	6	5	12	9	13	10	16	16	12	5	4	14
来館者数	1,097	2,380	2,376	1,649	539	3,181	2,735	1,996	889	507	402	526
県内	665	1,841	849	1,307	127	2,754	1,682	1,198	406	216	273	26
県外	432	539	1,527	342	412	427	1,053	798	483	291	129	500

令和3年度月別学校団体数及び学校団体来館者数

単位：人

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校団体数	16	2	16	16	5	16	71	58	45	6	1	9
県内	13	1	14	14	2	16	60	39	15	6	1	3
県外	3	1	2	2	3	0	11	29	30	0	0	6
来館者数	1,104	5	888	485	50	1,180	4,929	4,602	3,440	104	17	301
県内	817	2	565	461	34	1,180	4,403	1,780	1,027	104	17	139
県外	287	3	323	24	16	0	526	2,822	2,413	0	0	162

令和2年度月別学校団体数及び学校団体来館者数

単位：人

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
学校団体数	5	35	22	26	6	5	11
県内	2	29	18	21	6	5	7
県外	3	6	4	5	0	0	4
来館者数	146	2,659	1,252	1,529	169	210	217
県内	72	1,956	870	1,028	169	210	118
県外	74	703	382	501	0	0	99

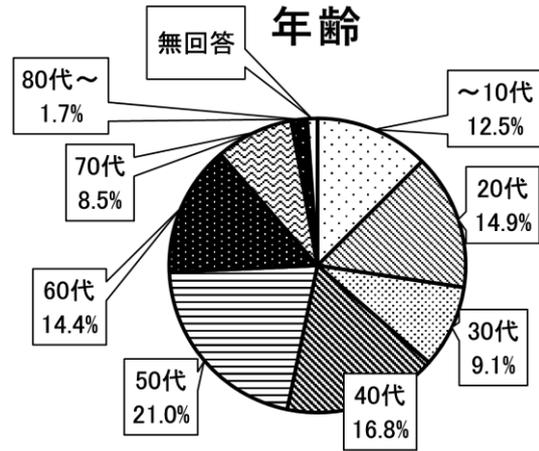
3節 来館者アンケートの概要

来館者の属性や施設の評価を把握するため、館内にアンケート用紙と記入台を設置し、一般来館者のアンケートを実施した。

- ・ 回答数：15,409 件
- ・ 期間：令和4年4月1日～令和5年3月31日

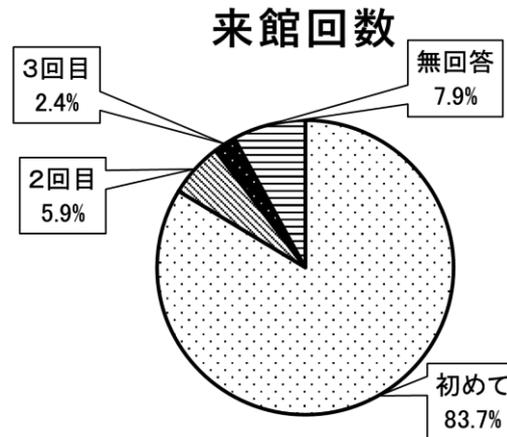
1. 年齢

年代	回答数	構成比
～10代	1,923	12.5%
20代	2,297	14.9%
30代	1,398	9.1%
40代	2,592	16.8%
50代	3,237	21.0%
60代	2,216	14.4%
70代	1,309	8.5%
80代～	265	1.7%
無回答	172	1.1%
計	15,409	



2. 性別

	回答数	構成比
女	5,884	38.2%
男	9,426	61.2%
無回答	99	0.6%
計	15,409	

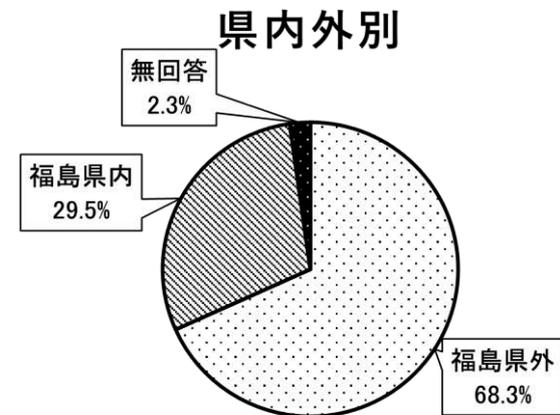


3. 来館回数

	回答数	構成比
初めて	12,894	83.7%
2回目	916	5.9%
3回目	374	2.4%
無回答	1,225	7.9%
計	15,409	

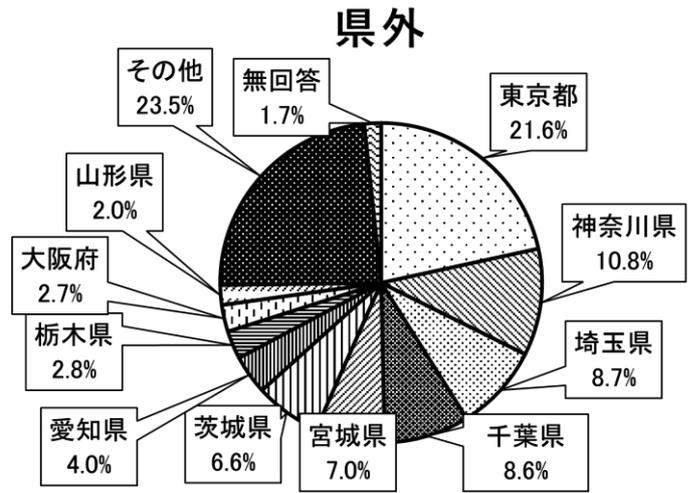
4. 県内外別

	回答数	構成比
福島県外	10,497	68.3%
福島県内	4,530	29.5%
無回答	346	2.3%
計	15,373	



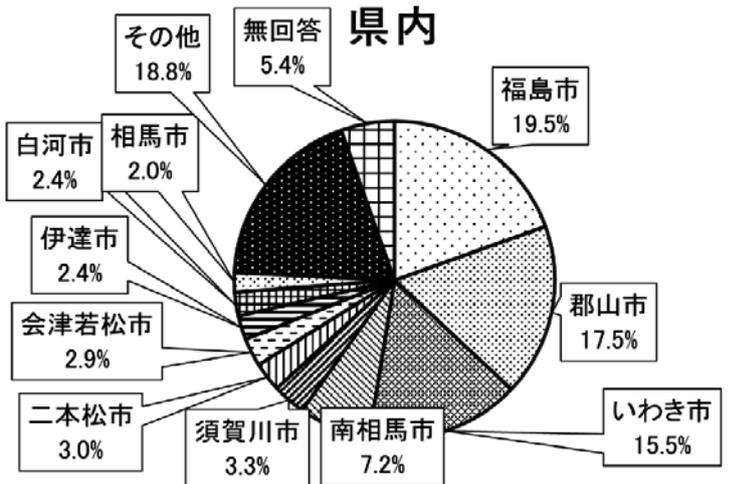
(1) 県外内訳

	都道府県名	人数
1	東京都	2,256
2	神奈川県	1,130
3	埼玉県	911
4	千葉県	895
5	宮城県	729
6	茨城県	695
7	愛知県	414
8	栃木県	298
9	大阪府	283
10	山形県	210
	その他	2,460
	無回答	177
	計	10,458



(2) 県内内訳

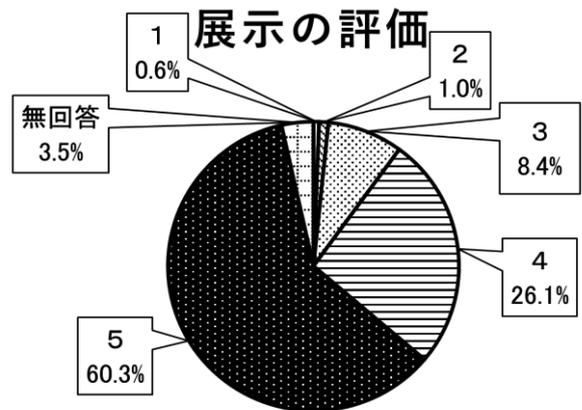
	市町村名	人数
1	福島市	882
2	郡山市	791
3	いわき市	702
4	南相馬市	327
5	須賀川市	151
6	二本松市	134
7	会津若松市	130
8	伊達市	110
9	白河市	109
10	相馬市	90
	その他	850
	無回答	244
	計	4,520



5. 伝承館の評価

(1) 展示内容

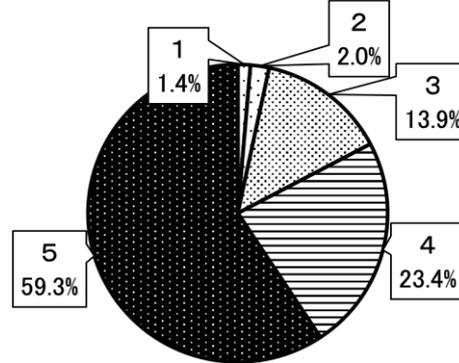
満足度	回答数	構成比
1 (低)	96	0.6%
2	159	1.0%
3	1,292	8.4%
4	4,029	26.1%
5 (高)	9,289	60.3%
無回答	544	3.5%
計	15,409	



(2) 語り部

満足度	回答数	構成比
1 (低)	80	1.4%
2	119	2.0%
3	823	13.9%
4	1,384	23.4%
5 (高)	3,504	59.3%
計	5,910	

語り部の評価

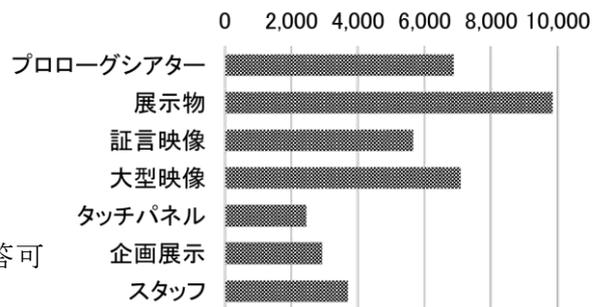


(3) 館内でよかったもの

プロローグシアター	6,884
展示物	9,859
証言映像	5,662
大型映像	7,079
タッチパネル	2,446
企画展示	2,929
スタッフ	3,698

※複数回答可

館内でよかったもの



4節 VIP等の視察対応

伝承館では、政府、地方自治体、海外の要人などの視察を積極的に受け入れている。これらの視察については、館長または副館長が対応している。

令和4年度の視察受け入れ実績は、84件、767人であった。

区分	件数	人数	主な団体等
政府関係者	29件	167人	・内閣官房長官 (7/15) ・復興大臣 (9/23) ・総務大臣 (12/18) ・復興大臣 (2/18)
海外要人等	11件	161人	・EU次期大使 (11/24) ・駐日外交団 (11/29) ・EUエネルギー担当委員 (12/3)
地方自治体関係者	18件	166人	・将来世代応援知事同盟 (5/25) ・原子力発電関係団体協議会 (10/21) ・長崎市長 (10/30)
その他	26件	273人	・経済同友会 (9/1) ・長崎平和推進協会 (11/3) ・日本旅行業協会 (12/9)
合計	84件	767人	

※随行者を含む。



将来世代応援知事同盟



E U次期大使



駐日外交団

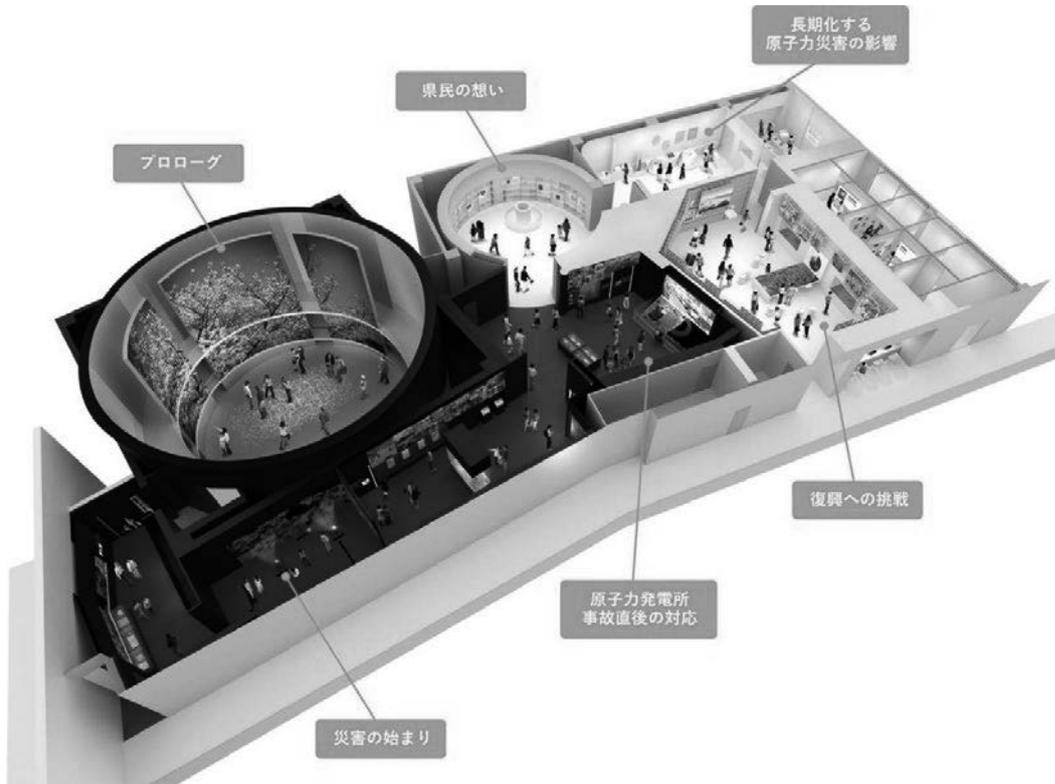


渡辺復興大臣

2章 展示

1節 常設展示

1. 展示資料



(東日本大震災・原子力災害伝承館 展示室全体像)

(1) プロローグ

原子力発電所建設当時の様子や地震・津波、そして原発事故発生から住民避難、復興や廃炉に向けた取組みについて、床面を含めた映像を上映している。



(2) 災害の始まり

事故前・事故発生時・事故直後の経過を「事故前の暮らし」「東日本大震災～地震と津波の記録～」「原子力発電所事故の発生」「災害対策本部の記録」として時系列でたどり、原子力災害の始まりを克明に、臨場感と共に展示している。



(3) 原子力発電所事故直後の対応

これまで経験したことのない原子力発電所事故発生直後の状況やその特殊性を、様々な資料や証言等をもとに振り返ります。錯綜する情報、転々とする避難生活、国内外の反応と支援を、「避難の開始」「県内に広がる不安」「国内外の反応と支援」に分けて展示している。



(5) 長期化する原子力災害の影響

長期化した原子力災害について、資料や専門家による解説映像等を通して学ぶことができます。「除染」「風評の払拭」「長期避難への対応」「健康に関する取り組み」の4つのテーマを展示している。



(4) 県民の想い

震災前の平穏な「ふるさとの日常」と、その「日常」が原発事故を機にどのように変わってしまったのか、県民の様々な想いを「災害時に感じた不安・恐れ」「学校生活の思い出・変化」「家族や地域生活との別れ・変化」「生活基盤の変化・将来への想い」という4つのコーナーに分け、証言映像と思い出の品等の実物展示を組み合わせで展示している。



(6) 復興への挑戦

困難を乗り越え復興に挑戦する福島県の姿を紹介しています。「復興のあゆみ」「廃炉の今」「みらいのまち」「福島イノベーション・コースト構想の取り組み」、そして、「県民によるチャレンジ」を発信することで、県内の他施設、地域への回遊を促すとともに、まちづくり体験等により、来館者の方々に福島未来について考えるきっかけを作っている。

2. 展示更新

令和5年2月22日～2月25日を臨時休館とし、展示の更新を行った。

- (1) プロローグシアターのモノクロ映像及びシアタースロー壁面年表のモノクロ写真のカラー化



- (2) タッチパネルコンテンツのデータや壁面などの情報更新

復興への歩みを示した年表、廃炉状況など 58 ヶ所の情報・データを更新した。

これまで「チェルノブイリ」と表記されていた箇所を、ウクライナ語の「チョルノービリ」との併記に変更した。

- (3) 展示資料の追加・入替

追加資料1点、追加写真パネル3点、入替資料2点を追加した。

(津波で漂着した鍵盤ハーモニカや地域と原子力発電所の関わりが分かるカレンダーなど)



2節 企画展示

1. 地震と津波のメカニズム

地震や津波などの災害が起きる仕組みをパネルや模型、動画を通して学ぶことができる企画展を開催した。また、期間中には子ども向けの実験教室や専門家による講演を行った。

ア 期間 令和4年7月15日（金）～10月31日（月）

イ 展示風景



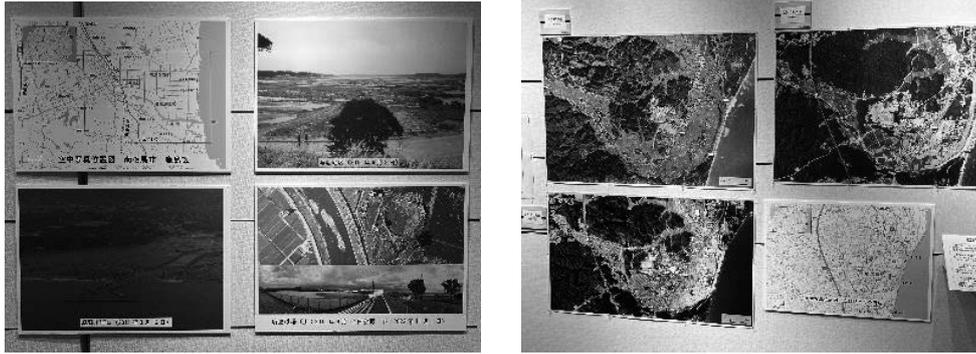
2. 地図と写真でみる東日本大震災

同じ場所・違う時期に撮影・作成された空中写真や地図から東日本大震災の被災地の歴史と復興を読み取ることができる企画展を開催した。

ア 期間 令和4年11月23日（水・祝）～令和5年3月21日（火・祝）

イ 展示風景





3節 出張展示

1. 東京特別展「東日本大震災と福島」

首都圏で初となる展示を東京都文京区の文京シビックセンターで開催した。写真や実物資料に加え、現在も続く原子力災害の影響や、福島第一原発から首都圏に電力が供給されていたことを示す解説パネルなどを展示した。

また、12月22日には、伝承館職員による震災解説、語り部講話等を行った。

ア 期間 令和4年12月19日（月）～12月25日（日）

イ 会場 文京シビックセンター（文京区役所）1階展示室2

ウ 展示風景、震災解説・語り部の様子



2. 羽田空港特別展

福島県と連携し、羽田空港で震災と復興を伝える特別展を開催した。写真や実物資料に加え、福島県内の震災伝承施設を紹介するパネルを展示した。

ア 期間 令和5年2月17日（金）～2月23日（木・祝）

イ 会場 羽田空港 第2ターミナル5F フライトデッキトキョー

ウ 展示風景



3. コミュタン福島でのパネル展

コミュタン福島と連携し、出張パネル展を開催した。子どもたちにも分かりやすいよう、被害の甚大さを一目で理解できる写真を中心に展示した。

ア 期間 令和4年6月25日（土）～8月5日（金）

イ 会場 福島県環境創造センター交流棟「コミュタン福島」多目的ラウンジ

ウ 展示風景



4. 磐梯山噴火記念館での展示

伝承館、磐梯山噴火記念館、福島県立博物館の3者で東日本大震災に関する展示を磐梯山噴火記念館で開催した。

ア 期間 令和4年9月17日（土）～11月27日（日）

イ 会場 磐梯山噴火記念館

ウ 展示風景



5. 県立図書館でのパネル展

震災の被害や避難所の様子などを伝える写真パネルを展示した。

- ア 期間 令和5年2月24日（金）～4月6日（木）
- イ 会場 福島県立図書館内 展示コーナー
- ウ 展示風景



4節 エントランス展示

1. UR都市機構パネル展

独立行政法人都市再生機構が主催する「UR都市機構フォトコンテスト2021」の復興部門の受賞作品などを展示した。

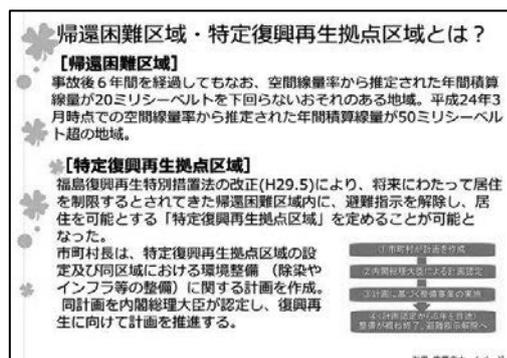
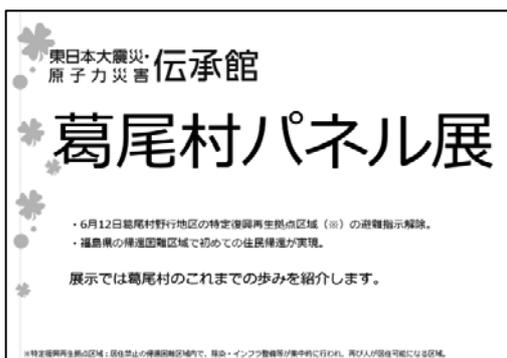
- ア 期間 令和4年4月6日（水）～5月16日（月）
- イ 展示風景



2. 葛尾村パネル展

令和4年6月12日に葛尾村野行地区の特定復興再生拠点区域における避難指示が解除され、帰還困難区域で初めてとなる住民帰還の実現という大きな節目に合わせ、葛尾村のこれまでの歩み等をパネルで紹介した。

- ア 期間 令和4年7月9日（土）～9月16日（金）
- イ 内容



6月12日
野行地区特定復興再生拠点区域の避難指示解除時の篠木村長コメント



本日、野行行政区の一部を除く、特定復興再生拠点区域の解除が行われたことにより、やっとスタートラインに立つことができました。
 11年という長い月日が経ったが、これからの拠点内の復興の始まりと考えている。
 住民の皆さんと話し合いを持ちながら、一步一步復興を進めていきたい。



震災前の葛尾村①

○ 世帯数 477世帯
 ○ 人口 1,567人
 ○ 面積 84.23km²
 ○ 標高(中心地) 450m

○ 主な産業(水稲を主に組合経営)
 ・水稲 207戸 1,24ha
 ・粟タピオ 37戸 20.2ha
 ・粟畑 110戸 354ha
 ・肥後牛 9戸 4,000頭
 ・乳用牛 2戸 110頭
 ・豚 2戸 猪 110頭
 ・養鶏 4戸 肥仔 1,850頭
 ・馬 1戸 20頭
 ・その他 インゲン、キュウリ、シイタケ、リンゴ

原発事故からの避難

- 2011年3月14日 21:00 オフサイトセンターから職員が避難したという情報入手。村長が避難を要請。役員、職員、住民が避難した。全村民を対象に避難勧告。福島県及び避難先(茨城県)へバス7台、ワゴン1台、公用車、自家用車で12人避難(ワゴン1台からの避難者含む)。1日目の避難者(町)は20名。避難先は2市。
- 2011年3月15日 会津若狭市西会館に270人、会津自然の家(避難先)に256人が避難(避難先)。
- 2011年3月21日 村に避難者が減少し、避難先(避難先)へバス2台、ワゴン1台、公用車、自家用車で12人避難(ワゴン1台からの避難者含む)。避難先(避難先)へバス2台、ワゴン1台、公用車、自家用車で12人避難(ワゴン1台からの避難者含む)。
- 2011年3月26日 三春町の仮設住宅へ入居開始。一階に居る避難者の避難先(避難先)へバス2台、ワゴン1台、公用車、自家用車で12人避難(ワゴン1台からの避難者含む)。
- 2011年4月 避難先(避難先)へバス2台、ワゴン1台、公用車、自家用車で12人避難(ワゴン1台からの避難者含む)。
- 2011年5月 避難先(避難先)へバス2台、ワゴン1台、公用車、自家用車で12人避難(ワゴン1台からの避難者含む)。
- 2011年5月25日 葛尾村役場三春出張所が閉鎖。
- 2011年6月12日 野行地区特定復興再生拠点区域の避難指示解除。
- 2011年 6月12日 野行地区特定復興再生拠点区域の避難指示解除。

大震災による被害状況

平成21年3月11日に発生した東日本大震災で、葛尾村は地震と原発事故の影響により大きな被害を受けました。

地震による被害 (平成24年6月15日時点)

区分	内容	備考
人的被害	行方不明1名(死亡確認済み)	
道路	村道・林道・農道 31箇所	倒壊14箇所
住宅	全壊 0戸、半壊 11戸、瓦落ち・窓ガラス等破損	
教育施設	中学校体育館(体育館)	
福祉施設	浄水場(浄水場) 本館2箇所	避難先(避難先)



ウ 展示風景



3. 大熊町パネル展

令和4年6月30日に大熊町内の特定復興再生拠点区域の避難指示が解除された。帰還困難区域において、住民の居住に向けた避難指示解除が実現したのは原発立地町として初めてであり、大熊町のこれまでの歩み、中間貯蔵施設の受入れ、大川原・中屋敷地区の先行解除、今回の避難指示解除等をパネルで紹介した。

ア 期間 令和4年8月12日（金）～11月21日（月）

イ 内容

東日本大震災・原子力災害 伝承館

大熊町パネル展

- ・6月30日大熊町内の特定復興再生拠点区域の避難指示解除。
- ・帰還困難区域の住民帰還が実現したのは大熊町に続き2例目。

大熊町のこれまでの歩みについて、以下を中心に紹介します。

中間貯蔵施設の受入れ (平成26年12月16日)

大川原・中屋敷地区の先行解除 (平成31年 4月10日)

特定復興再生拠点区域の解除 (令和 4年 6月30日)

6月30日
大熊町内特定復興再生拠点区域の
避難指示解除時の吉田町長コメント



かつて町の中心部だった地域を含む特定復興再生拠点区域の避難指示が解除されたことは、大熊町の復興に向けた大きな節目となりました。

一方で、町内には帰還の見通しが立たない地域も多く残っており、復興に向けてまだまだ様々な課題があることから、今回の避難指示解除はゴールではなく、ようやくスタートラインに立つことができるものと考えております。

今回の避難指示解除を契機とし、町内の生活環境などの整備を加速させ復興を前に進めていくとともに、今後も大熊町に思いを寄せてくださいる方々の絆を大切にしながら、町内全域の避難指示解除、ふるさとの再生に向け、一つ一つ取り組みを積み重ねてまいります。

震災前の大熊町①

- 世帯数 4,235世帯
- 人口 11,505人
- 面積 78.71km²

主な名産品

- ・梨
- ・キウイ
- ・ヒラメ (養殖)
- ・カレイ (養殖)
- ・鮭

震災前の大熊町②

大熊町の震災後の歩み

平成23年 3月12日 金町避難指示、田村市へ避難開始

平成23年 4月 2日 会津地方へ二次避難開始

平成23年 4月 5日 会津若松市に町役場会津若松出張所開設

平成23年10月11日 いわき市に町役場いわき連絡事務所開設
(平成25年12月 1日、いわき市事務所へ移転変更)

平成24年10月 1日 二本松市に町役場中津川出張所開設
(平成26年 4月 1日郡山市に移転)

平成25年 4月 1日 大熊町内に町役場現地連絡事務所開設

平成24年12月16日 中間貯蔵施設の建設費入金準備

平成27年 2月26日 中間貯蔵施設への搬入入金を表明

平成28年 4月 1日 大熊町内に町役場大川原連絡事務所開設

平成28年11月10日 特定復興再生拠点区域(復興再生計画)の選定

平成30年 4月24日 大川原地区(原住地等区域)・中屋敷地区(避難指示解除準備区域)の準備開始

平成31年 4月10日 大川原地区・中屋敷地区の避難指示解除

平成31年 4月14日 大熊町役場新庁舎開庁

令和2年 4月 1日 復興公営住宅(大川原)の入居開始

令和 2年 3月 5日 大野駅前周辺(特定復興再生拠点区域の一部)の避難指示解除

令和 3年10月17日 大川原地区に交流ゾーン(農業施設・遊歩道施設・交流施設)グランドオープン

令和 3年12月 3日 特定復興再生拠点区域の準備開始

令和 4年 6月30日 特定復興再生拠点区域の避難指示解除

(大熊町の「震災後の歩み」を参考に作成)

大震災による被害状況

震災による被害 (令和4年4月1日時点)

平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、町内では66世帯を襲われ、地震に伴う津波により16年約2割が浸水した。

人的被害
死者・143名(重傷12名、関連死131名)

建物被害
全壊 : 306棟
津波による全壊家屋 : 48棟(内訳)
大規模半壊 : 716棟
半壊 : 1,913棟
一部損壊 : 29棟

田村市内の避難所 (平成23年3月15~17日)

大熊町内の津波被害 (平成23年3月11日)

(大熊町より提供)

原子力災害による避難状況

行政機能の再開・移転

避難先で町民に行政サービスを提供するため、町役場の出張所や連絡事務所を設置した。

行政機能の位置図（平成29年3月時点）

- 会津若松出張所(約98km)
- 中通り連絡事務所(約70km)
- いわき出張所(約410km)
- 大川原連絡事務所(約7.2km)

【令和4年8月現在の状況】
 町役場本庁舎（大熊町大川原地区）
 会津若松出張所（いわき）出張所・中通り連絡事務所

町民の居住・避難状況（大熊町調べ）

東日本大震災に起因した東京電力福島第一原子力発電所の事故により、大熊町の全町民が避難を余儀なくされた。

【平成23年8月31日時点】
 県外避難者 3,843人（埼玉県624人、東京都571人、新潟県473人、茨城県388人、千葉県325人ほか）
 県内避難者 7,649人（会津若松市3,684人、いわき市1,754人、郡山市729人ほか）

【平成24年10月31日時点】
 県外避難者 3,126人（埼玉県475人、東京都446人、茨城県380人、新潟県339人、千葉県276人ほか）
 県内避難者 6,254人（いわき市3,400人、会津若松市2,850人、郡山市814人ほか）

【平成28年9月1日時点】
 県外避難者 2,448人（茨城県571人、埼玉県493人、東京都450人、千葉県319人、新潟県289人ほか）
 県内避難者 6,470人（いわき市4,753人、会津若松市1,191人、郡山市1,134人ほか）

【令和4年7月1日時点】
 県外避難者 2,203人（茨城県457人、埼玉県351人、千葉県246人、東京都237人ほか）
 県内（大熊町を除く）県外・県内合計 7,766人（いわき市4,513人、郡山市1,013人、会津若松市542人ほか）

（データ引用：平成23年、平成24年、平成28年は大熊町町民説明会、令和4年は大熊町HP）

中間貯蔵施設とは

- 福島県内で、国が指定する放射性物質を含む廃棄物や汚染土壌等の中間貯蔵施設を建設する。国が指定するまでの間、町民に安全に貯蔵・保管する期間として中間貯蔵施設に搬入する。
- 国が指定するまでの間、福島県内に発生した放射性廃棄物の中間貯蔵施設に搬入する。
- 国が指定するまでの間、福島県内に発生した放射性廃棄物の中間貯蔵施設に搬入する。

● 大熊町の約14%を占める
 ● 震災前の人口11,866人

○ 除染廃棄物の輸送状況
 ・福島県内の除染廃棄物等については、平成27年から中間貯蔵施設への輸送が行われ、輸送対象約1,400万m³の内、約1,341万m³が運び込まれた（令和4年3月時点）。

中間貯蔵施設建設までの経緯

- 平成23年10月 国が中間貯蔵施設等の基本的考え方公表（主な内容）
 ・中間貯蔵施設の確保及び維持管理は国が行う
 ・平成27年1月を目途にして施設の併用を開始するよう最大限努力する
 ・福島県内の土壌、廃棄物のみを貯蔵対象とする
 ・中間貯蔵開始後30年以内に、福島県外で最終処分を完了する
- 平成23年12月～ 国が福島県及び地元町村に対し、中間貯蔵施設の設置について検討を要請
- 平成24年11月 福島県知事が、地元への丁寧な説明等を条件として調査を受入
- 平成25年1月～ 国が調査のための住民説明会を実施
- 平成25年4月～ 国が地元の理解を得て、現地調査（ボーリング調査等）を実施
- 平成25年12月 調査結果等を踏まえ、国が福島県及び双葉町、大熊町、楡葉町に対し、中間貯蔵施設の受入を要請
- 平成26年2月 福島県知事から国に対し、施設の配置計画の見直し等を申入れ
- 平成26年3月 福島県知事の申入れに対し、国が当該2町に集約すること等を回答
- 平成26年4月 国が福島県及び双葉町、大熊町に対し、生活再建・地域復興等について追加調査を行うとともに、速やかな住民説明会の開催を改めて要請
- 平成26年12月 大熊町が中間貯蔵施設の建設受入を正式に決定

町は平成26年12月16日、中間貯蔵施設の建設受け入れを正式に決定。町は町長で全戸に「中間貯蔵施設の受け入れ判断について」という文書を配布した。そこで町長は「償い親しんだ土地を『遠慮施設』ともしつべき施設のため提供しなければならぬ地権者の皆さまの無念は、察するに余りあるものがあります」とし、受け入れに至った理由として以下の5点を記した。

- ①国と粘り強く条件協議を行った結果、町が求めてきた多くの事項が認められた。これ以上の国の進歩は見込めない中、判断を引き延ばすことは国民的な理解を得られない。
- ②自宅近くに除染廃棄物を仮置きしている県民のため受け入れをよしと考える人も多い。また早く契約して新たな生活を始めたい人、町に戻りたいと考える人のため、行政の責任として次のステップに進む必要がある。
- ③安全協定など5項目のすべてで納得できる内容が出てこなければ最終的に搬入受け入れはせず、国の適切な対応を担保できる。
- ④町民がお世話になっている避難先の自治体でも、仮置き場から除染廃棄物が搬出されることを期待している。
- ⑤県からの交付金が予算化される見通しである。

復興への第一歩 大川原地区・中屋敷地区

平成25年度に策定した「大熊町まちづくりビジョン」で、本格除染が完了し比較的放射線量の低い大川原地区をまち全体の復興の加速を図るための最初のフィールド「大川原地区復興拠点」として開発を行う。

- 平成28年8月 復興への第一歩として、町内初の特別自治体居住制限区域の大川原地区と避難指示区域である中屋敷地区で実施された。
- 平成29年11月 「大熊町特定復興再生拠点区域復興再生計画」が国に認定され、避難困難区域である下野上地区などの町中心部を対象とした復興の計画が動き出した。
- 平成30年4月24日 大川原地区と中屋敷地区のインフラなどの生活環境や防犯・医療面での支援体制がある程度整ったことから、準備宿泊が始まり、長期宿泊が可能になった。
- 平成31年4月10日 大川原地区と中屋敷地区の避難指示が解除され、震災と原発事故から8年余りの時間を経て、ようやく故郷の一部を取り戻した。
- 令和元年5月 大川原復興拠点に整備した町役場新庁舎での業務が始まり、復興への足掛かりとして各課題への取り組みを加速させた。

現在の大川原地区復興拠点

面積 39ha（大熊町面積の0.5%）

大川原地区周辺変換（令和4年7月21日）

町民生活の向上、防災・防犯、環境・健康、子育て支援、高齢者支援、防災・防犯、環境・健康、子育て支援、高齢者支援

大熊町 特定復興再生拠点区域（避難指示解除区域+解除済区域）

町民生活の向上、防災・防犯、環境・健康、子育て支援、高齢者支援

避難指示解除に向けた住民説明会

令和4年6月4日、5日に福島県内4カ所で特定復興再生拠点区域の避難指示解除に向けた説明会が開催された。放射線に対する不安やインフラ復旧が不十分であることを指摘する声が多く上がったが、解除自体に反対する意見はなかった。

- ① 町民生活の向上
 - 大川原地区内での本格除染実施
 - 特定復興再生拠点区域での生活環境の整備
 - 子育て支援
 - 高齢者支援
 - 防災・防犯の強化
 - 住民生活の向上による地域活性化の促進
 - 産業の発展状況・計画等
- ② 防災・防犯の強化
 - 防災訓練の実施
 - 防災訓練の強化
 - 防災訓練の強化
 - 防災訓練の強化
- ③ 避難指示解除後の各種支援
 - 防災訓練の実施
 - 防災訓練の強化
 - 防災訓練の強化
 - 防災訓練の強化

避難指示解除を受けた合同パトロール出動式

（令和4年6月30日大熊町駅前）



大熊町の今①

○人口・世帯数（令和4年7月1日時点）
10,069人 4,790世帯
(県外：2,303人 1,162世帯)
(県内：7,766人 3,628世帯)

特定復興再生拠点区域
面積 860ha（大熊町面積の10.9%）
震災前の人口 5,881人（町全体の51.1%）

【町内居住者数（内数）】
379人 319世帯

【町内居住推計人口】
(町に在住登録がない居住者を含めた推計人数)
922人

【準備宿泊者数】
50人 18世帯
(令和3年12月3日から令和4年6月30日に要請)

特定復興再生拠点区域の大野駅前周辺空撮
(令和4年7月21日)

※準備宿泊・・・「ふるさとへの帰還に向けた準備のための宿泊」（以下「準備宿泊」）は、避難指示が解除された場合とみなすことでの生活を円滑に再開するための準備作業を行っていただくため、本来、避難指示区域内では禁止されている宿泊施設での宿泊に、確認される見込みの内に限り、登録手続を行っていただく上での特例的に対応するもの（経済産業省HPより引用）

大熊町の今②

○4つの産業拠点を中心に産業誘致と新産業の創出を進めている

名称	①大熊加工食品工場	②大熊中央産業拠点	③産業交流施設【大野駅前】	イノベーション施設
概要	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備
コンセプト	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備
イメージ	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備
運営主体	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備	大熊町産物の加工・加工・加工施設の整備

営農活動再開の先駆け

○営農活動再開の先駆けとして、町津路を広く広げるとともに、町民が帰還した際の雇用の場となることを目指して、約4.8ヘクタールの敷地に、高さ6メートルほどのビニールハウスや果樹出荷管理棟、作業室等を建設した。施設管理運営者「株式会社オオカサファームおおくま」による大熊産地利用型園地工場として、平成31年4月から夏秋いちごをメインとした周年栽培を開始。

令和元年8月に出荷第1号となる「すずあかね」を収穫。以降も「かおり野」「やよいひめ」など、いろいろな個性と特徴を持ついちごを周年栽培。

ウ 展示風景

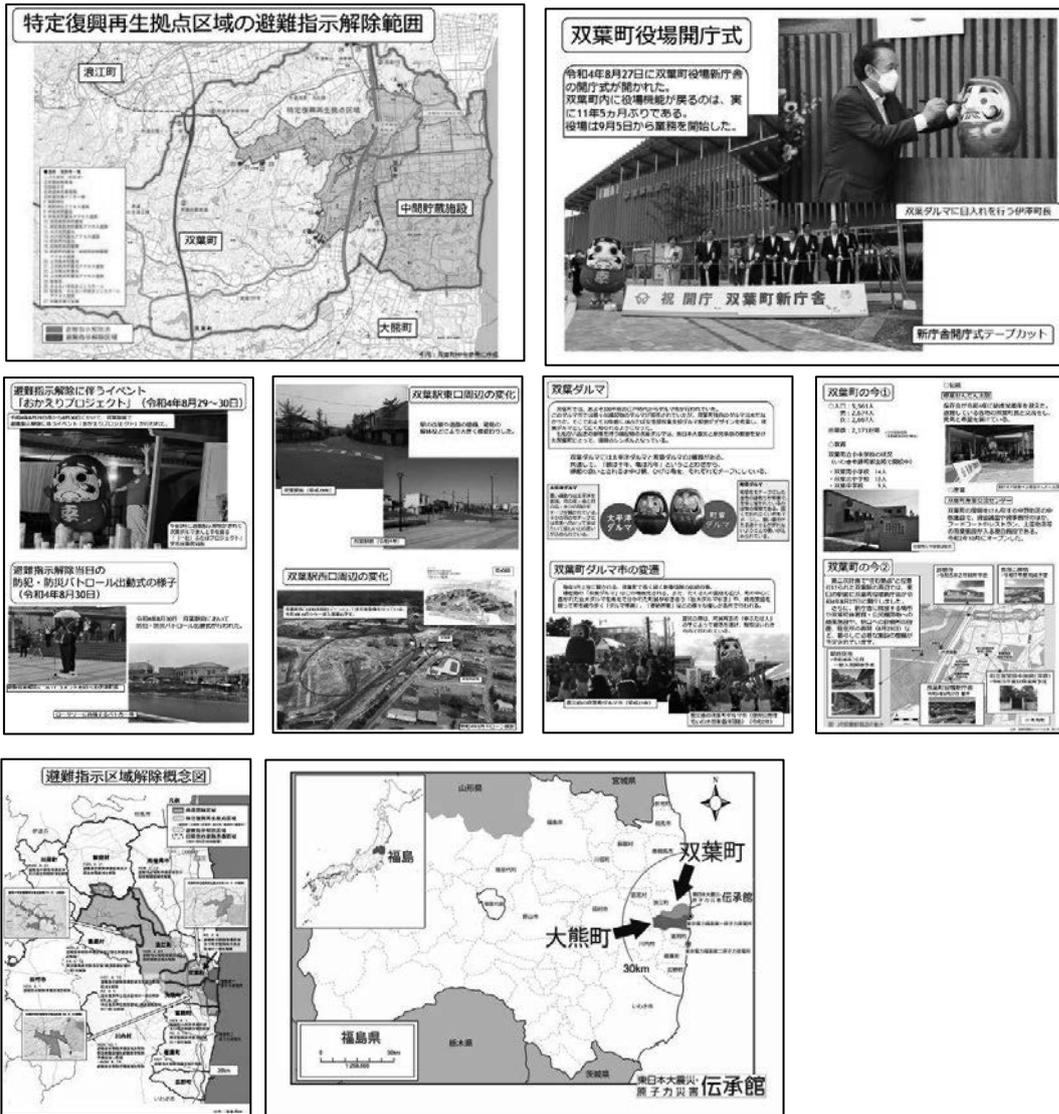


4. 双葉町パネル展

令和4年8月30日に双葉町内の特定復興再生拠点区域の避難指示が解除され、震災から約11年半が経過して初めて震災後、住民の居住が可能となった。双葉町の「長期避難」、「復興への取り組み」、「特定復興再生拠点区域の避難指示解除」を中心にこれまでの歩み等をパネルで紹介した。

ア 期間 令和4年9月17日（土）～11月21日（月）

イ 内容



ウ 展示風景

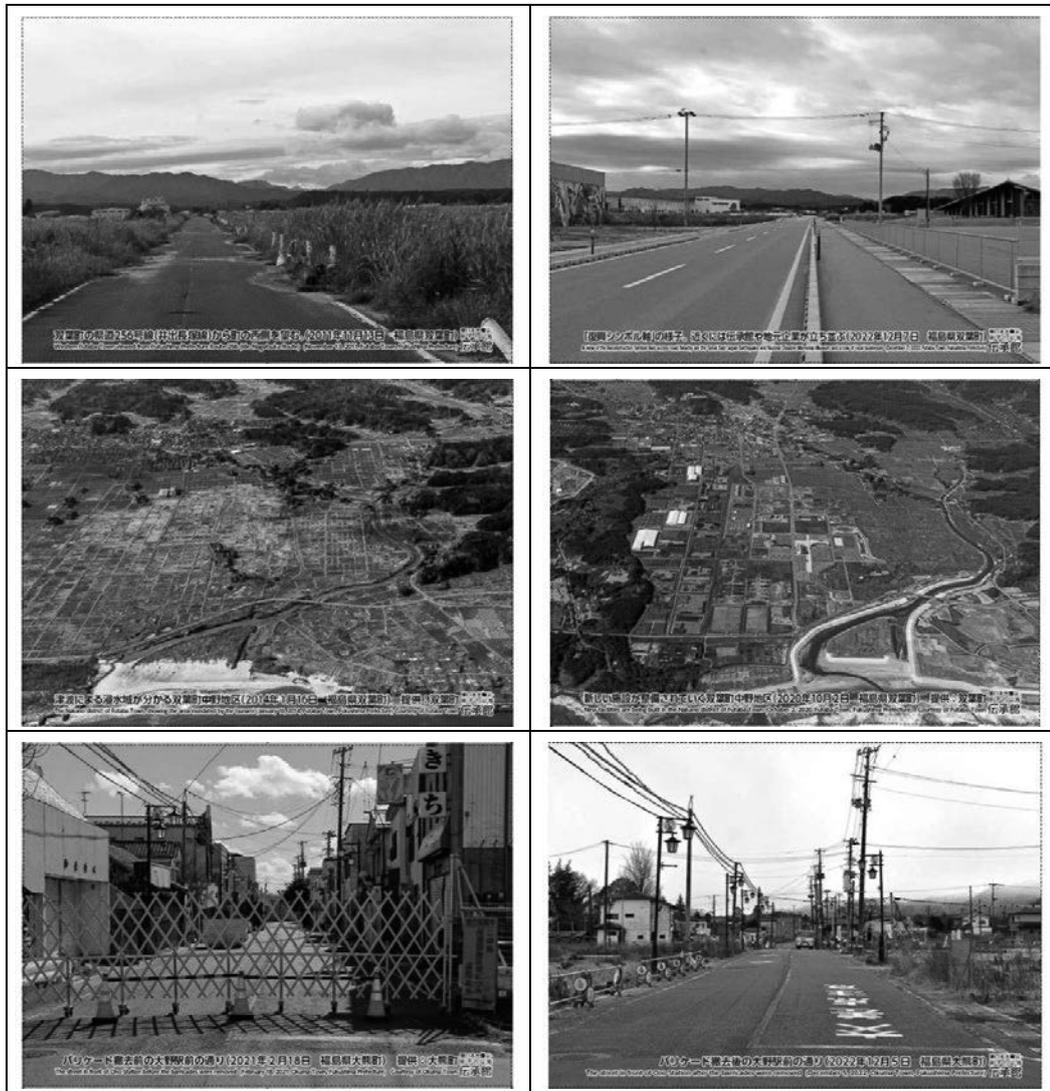


5. ひと目でわかる写真パネル展

震災前と現在、震災後と現在等の同じ場所でありながら、異なる時期の景観を比較する写真パネルを展示した。

ア 期間 令和5年3月～（一部はエントランスに常設展示）

イ 内容



3 章 資料収集・保存

1節 資料収集・保存・収蔵

「東日本大震災・原子力災害アーカイブ拠点施設に関する資料収集ガイドライン」に基づき、資料の収集・保存を実施した。

1. 資料収集

(1) 収集点数 (令和5年3月31日現在)

	資料形態	令和3年度まで	令和4年度まで	計
一次資料	モノ	9,459	84	9,543
	紙	73,960	6,601	80,561
	写真	105,366	4,764	110,130
	映像・音声	4,939	74	5,013
二次資料	図書・雑誌	2,216	900	3,116
	冊子・会報	22,944	36	22,980
	新聞	51,009	349	51,358
	視聴覚資料	529	1	530
	合計	270,597	12,809	283,406
	備考	(その他 175 点含む)		(その他 175 点含む)

※ 「その他」は、デジタルデータであるものの、拡張子が特殊といった理由で、PC上で中身を確認できなかったものである。

(2) 主な収集物 (令和4年度)

ア 一次資料

(ア) モノ

- ・ 帰還困難区域等に設置してあった立て看板
- ・ 福島県立富岡養護学校のハッピーや生徒が製作したコースター
- ・ 請戸地区にあったコップや洋服などの津波漂着物

帰還困難区域に設置してあった立て看板 (大熊町)	帰還困難区域で使用されていた簡易の金網バリケード (富岡町)
	

(イ) 紙

- ・ビッグパレットふくしまの避難者記録ファイル
- ・横浜市やいわき市で被災した方の被災体験記

(ウ) 写真

- ・避難指示解除（葛尾村・大熊町・双葉町）の写真
- ・震災前及び避難先での請戸の田植踊の写真
- ・被災ペットの保護活動写真

<p>避難指示解除によるゲート開放（葛尾村）</p>	<p>避難指示解除によるパトロール出動式（大熊町）</p>
	
<p>避難指示解除のセレモニー（双葉町）</p>	<p>震災前（1988年）に請戸地区内で行われていた田植踊（浪江町）</p>
	

(エ) 映像・音声

- ・映像「原子力とわが町」
- ・一時立ち入り時の防災無線音声
- ・川内村民の証言記録

イ 二次資料

(ア) 図書・雑誌

- ・『震災時間論』
- ・東日本大震災が福島県産果樹にもたらした影響：モノとリンゴの贈答を事例として～

(イ) 冊子・会報

- ・富岡養護学校の後援会会報（平成23年3月7日）
- ・福島県における復興祈念公園のあり方（基本構想への県提言）検討有識者会議

- (ウ) 新聞
 - ・新聞記事の切り抜き
- (エ) 視聴覚資料
 - ・「福島ソングスケイプ」アサダワタルと下神白団地のみなさん

2. 証言収集

東日本大震災と原子力災害に関する様々な体験や想いを後世に残すことを目的に、令和5年3月11日（土）から、被災体験を綴った手記や日記などを広く募集する取組みを開始した。なお、被災体験が書かれた書籍、音声・映像記録も対象としている。募集期限は設けず、長期的に収集していく予定である。

令和4年度は3件の申込みがあった。

資料収集チラシ

東日本大震災・原子力災害 伝承館

3.11震災関連資料の提供にご協力ください。

東日本大震災から10年以上の歳月が経過しました。当館では、震災の記録と教訓を後世に残し、継承していくため、震災関連資料の収集・保存を行っています。

震災関連の写真や映像、音声などの資料・情報をご提供いただける方は、お電話、または下記の専用メールアドレスにてご連絡をお願いいたします。

収集資料(一例)

- 震災前の地域生活の様子が分かる資料
- 地震や津波、原子力災害の影響を伝える資料
- 避難生活に関する資料
- 復旧・復興の過程が分かる資料
- 手記や日記など被災体験記
- 避難地域内の実物資料
- 震災時の記録映像や証言映像、音声

資料の取扱いについて

- ・提供いただいた資料は当館で保存・公開することを基本とします。
- ・個人情報の取扱い、複製等、行いません。

TEL0240-23-4402 (事業課)
shiryou@fipo.or.jp

証言収集チラシ

東日本大震災・原子力災害 伝承館

残しておきたい

あの日の記憶

東日本大震災・原子力災害から10年以上が経ちました。あのとき話せなかった思い、胸にしまい込んだ悲しき、怒り、ずっと気がかりだったこと…など、あなたの被災体験や身近な方の手記などをお寄せください。当館では、皆さまの声を収集・保存し、後世に伝えていきます。

たとえば、次のようなものを受け付けています。

- 東日本大震災および原子力災害で被災された方が書かれた、被災体験に関する手記、日記など。
- 被災体験が掲載・記録されている書籍、音声・映像記録など。

詳しくは裏面をご覧ください →

3. 資料活用

震災と原子力災害の記録と経験を伝えるため、伝承館が所蔵する資料や震災関連パネルの貸し出しを行った。

ア 福島テレビ株式会社

(ア) 期間 令和4年9月11日（日）～9月23日（金・祝）

(イ) 貸出資料 請戸小学校ピアノ

イ (個人のため非公開)

(ア) 期間 令和4年10月5日（水）

- (イ) 貸出資料 川内村防災無線音声データ
- ウ 福島県名古屋事務所
- (ア) 期間 令和4年11月10日(木)～11月15日(火)
- (イ) 貸出資料 写真展示パネル

2節 資料閲覧室

1. 図書資料閲覧サービス

資料閲覧室には図書類を約2,000冊配架している。このうち、重複を除いた図書の総数(版違いを含む)は1,939冊である。これらの図書は開架棚に配架され、利用者が自由に閲覧できる。

現在のところ、資料閲覧室では貸し出しサービス、複写サービスおよびレファレンスサービスは提供していない。一方でWeb-OPAC(オンライン蔵書目録)を整備し、インターネット上から蔵書検索ができる。

2. 収蔵図書の内容

資料収集の当初から震災記録誌、字誌、地域史、学術調査報告など流通量が少ないローカルな図書(例えば関係者にのみ配布された図書など)の収集に力を入れてきた。また、令和3年度に企画展「絵本で見る東日本大震災」を開催する際に集めた絵本なども配架している。



4章 語り部

1 節 館内語り部講話

1. 館内語り部講話

東日本大震災及び原子力災害を経験した地域住民の方の生の声を聴くことができる「語り部講話」を館内で開催している。伝承館に登録している語り部が日替わりで担当しており、入館券をお持ちの方であればどなたでも聞くことができる（各回先着 18 席）。

展示エリア内のワークショップスペースにて、休館日を除く毎日、1 日 4 回（各回 40 分間）開催している。

館内語り部講話時間

第 1 回	10:00～10:40
第 2 回	11:30～12:10
第 3 回	13:30～14:10
第 4 回	15:00～15:40

2. 館内語り部登録人数及び実績

館内語り部には、32 名が登録している（令和 5 年 3 月末現在）。

令和 4 年度は、1,212 回開催し、約 10,400 人が聴講した。

（各語り部のテーマ一覧）

紙芝居「菜の花物語」
あの日から 10 年間の久之浜町 そしてこれからは…
震災経験とその後の活動
東京における 3.11 東日本大震災と福島第一原発事故
震災当日の行動と教訓及び復興事業について
「当たり前」はない
自分の命を守る
震災紙芝居
長い避難生活を支えた励ましの数々
震災・原発事故を語る
東日本大震災と避難生活の実態
4つの災害を経験して
あの日のお葉町～被災・避難経験～
東日本大震災—あの日から 11 年が過ぎて
行動・思い・学んだこと
東日本大震災あの日、あの時
震災、避難経験を振り返って
防災意識・防災訓練の大切さについて
南相馬・ある家族の 2 年
震災・原発事故から復興へ

震災後の2日間とその後
震災発生から全町避難を振り返って
『残照』～震災の記憶～
震災紙芝居
置き去りにされた動物
震災体験と動物たち、福島第一原発5日間の攻防
伝統文化存続の危機と伝承
10年かけて踏み出した一歩（大好きな地元との向き合い方）
災害時の情報のとり方と行動に移す力
当時小学5年生が感じたこと
生きのびるために
震災・避難・現在の歩み
震災時の体験と伝えたいこと
双葉の子どもたち
私の11年
請戸小学校物語
20歳の私が伝えたいこと

3. 館内語り部を対象とした研修

館内語り部の技術向上と交流を目的として語り部研修を2回実施した。

○第1回 令和4年6月19日（日）、20日（月）

参加者：16名

場 所：伝承館研修室

講 師：気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館館長 芳賀一郎氏

「東日本大震災時における向洋高等学校の避難動向」

○第2回 令和5年2月22日（水）、23日（木）

参加者：24名

場 所：伝承館研修室

講 師：株式会社インソース 森りか氏「プレゼンテーション研修」

2節 館外での語り部講話、交流

1. 米国EPA長官来日時語り部講演

日時：令和4年9月2日（金）

場所：環境省

米国環境保護庁のリーガン長官が、来日時に東日本大震災当時の個人的な経験を聞きたいとの意向から、伝承館職員が語り部講演を行った。

2. いわて復興未来塾への参加

日時：令和4年9月25日（日）

場所：岩手県陸前高田市コミュニティホール

岩手県で開催された「第2回いわて復興未来塾」の「震災語り部等ガイドサミット」のパネリストとして伝承館職員が登壇し、自身の経験を語った。

3. 東洋大学での出張語り部

日時：令和4年12月22日（木）

場所：東洋大学

東京都文京区で開催した伝承館の特別展の関連事業として、東洋大学の協力を得て、伝承館職員が語り部講話を行った。

4. 震災伝承の取組に協力

日時：令和4年6月3日（金）、6月13日（月）、6月24日（金）、
7月11日（月）

場所：福島市内の小学校4校

福島民友新聞社の「震災伝承プロジェクト」に協力し、福島市内の小学校で、子どもたちに震災を伝える授業に伝承館職員が参加し、自身の経験を語った。

<p>米国 EPA 長官来日時 の語り部講演 (環境省)</p>	<p>震災語り部等ガイドサミットへの参加 (岩手県陸前高田市)</p>
	
<p>東洋大学での語り部講話 (東京都)</p>	<p>福島民友社の震災伝承プロジェクトへの協力 (福島市)</p>
	

5章 研修

1節 一般研修

伝承館では、館内の展示見学に加え、下記の研修プログラムを提供しており、福島県で起きた未曾有の複合災害の事実や復興の現状・課題を体感することができる。

1. 研修語り部講話

震災を経験した語り部から、当時の不安や悲しみ、災害への備え、未来に向けての想いなどを聞く。

2. フィールドワーク

双葉町と浪江町をバスで巡り、実際に被災地の現状を見学する。

3. ワークショップ

研修を通して知ったこと、感じたことを振り返り、参加者の間で共有する。

※ ワークショップは、フィールドワークや研修語り部講話と併せて申込む「フルパッケージ」の場合に限り受講できるプログラム。

語り部講話

フィールドワーク

ワークショップ



4. 研修料金

		一般	小中高生
入館料	個人（1人あたり）	600円	300円
※減免制度あり	団体入館料（1人あたり）	480円	240円

※研修プログラムはお客様の都合に合わせて選択できます。

+

研修受講料 (1人あたり)	フルパッケージ (4時間～)	ガイダンス (15分)	フィールドワーク (60分)	3,000円	1,500円
		展示見学 (60分)	研修語り部講話 (40分)		
			ワークショップ (60分)		
	選択受講 ※複数選択可	展示見学 (60分)	フィールドワーク (60分)	1,000円	500円
			研修語り部講話 (40分)	1,000円	500円

※ その他、研修料金等の詳細な料金体系については、東日本大震災・原子力災害伝承館HP (<https://www.fipo.or.jp/lore/>) を参照。

5. 一般研修参加者数

	令和4年度合計		開館以降累計	
	団体数	人数	団体数	人数
全体	280	11,475	516	24,337
学校団体	111	7,451	251	18,006
その他団体	169	4,024	265	6,331

2節 専門研修

伝承館では、東日本大震災と原子力災害について、より詳しく学ぶことができる専門研修を実施している。

(1) 専門講座

館長及び上級研究員による各専門分野に関する専門講座を実施した。

ア 講師と専門分野

講師	分野
館長 高村昇	放射線被ばくと健康被害、リスクコミュニケーション
上級研究員 安田仲宏	原子力防災と放射線
上級研究員 関谷直也	風評、避難における社会心理
上級研究員 開沼博	福島復興・廃炉の社会科学、ボードゲーム型復興・廃炉体験で学ぶ福島学

イ 実績

受講者数 181名（11団体）

（内訳）

学校関係 103名（5団体）、その他（研究機関、企業等）78名（6団体）

(2) 上級研究員の企画による研修プログラム

ア 福島学カレッジ（令和4年10月～令和5年2月 全5回）

開沼上級研究員等が講師となり、中高生を対象に、「福島の研究」を実践する機会を提供した。県内外から中高生13名が参加した。

東日本大震災・原子力災害伝承館の展示見学や講義、フィールドワークを通じて震災・原子力災害への学びを深め、大学教授や伝承館の研究員の支援を受けて、研究計画を立案し、研究発表を実施した。

<プログラム>

第1回	10/15・16	開講式、オリエンテーション
第2回	11/12・13	研究手法の演習、研究計画作成
第3回	12/26・27	現地インタビュー、視察
第4回	1/28・29	中間報告会
第5回	2/18・19	最終報告会、修了式

イ 自治体職員向け研修（令和5年2月10日）

関谷上級研究員が講師となり、新潟県職員（防災担当）を対象に、被災地域のフィールドワーク等を実施し15名が参加した。

（10/15 開講式、オリエンテーション）



（2/19 最終報告会）



行程：東日本大震災・大震災原子力災害伝承館～福島第一原子力発電所
～東京電力廃炉資料館



6章 調査・研究

1 節 概要

1. 目的及びミッション

伝承館では、主要4事業（※）の1つとして、「調査・研究事業」を行っています。蓄積した研究成果については、伝承館の「研修」や「展示・プレゼンテーション」に反映させることを通じ、多くの方へ福島における原子力災害の教訓や現状を発信するとともに、収集した資料の体系化を図ることにより、福島の経験を後世に継承する「知の交流拠点」としての役割を果たしていく。

調査・研究事業の目的は復興を担う人材の育成を行い、被災地の復興を加速させるとともに、今後発生することが否定できない国内外の災害に対する防災・減災に寄与することである。

この目的を達成するため、3つのミッションを設定し、研究事業を推進している。

※ 主要4事業…資料の収集・保存、展示・プレゼンテーション、研修及び調査・研究

【目的を達成するためのミッション】

1 教訓の体系化

伝承館では、複合災害、特に原子力災害とそこからの復興過程に関する実態に係る資料を収集し、調査・研究を俯瞰的に行い体系化し、そこから得られる教訓の抽出を通じ、復興及び減災に寄与します。

2 教訓の発信

伝承館に蓄積・体系化された教訓を広く世界に還元するため、積極的な情報発信や調査・研究成果をもとにした専門的研修プログラムの構築や展示・プレゼンテーション事業への反映等広く発信します。

3 研究者の育成

大規模災害、広域災害・複合災害、特に原子力災害研究と復興研究の先駆者として、新たな知の体系化と、その学術的価値の確立を先導していく研究者、防災、減災、復興を担う人材を育成するとともに、広く福島に関心を抱く方々が集い学ぶことのできる知の拠点としての役割を果たします。

2. 研究体制（令和5年3月末時点）

伝承館における調査・研究事業は、これまで様々な分野で福島に係る研究を行ってきた館長及び上級研究員に常任研究員を加えた「文理融合」の研究体制により進めている。常任研究員に対しては館長・上級研究員がアドバイザーとなり、研究等のサポート・実績の管理を行っている。

また、全国の大学等の研究機関や国際機関、地元自治体、企業等との共同研究やシンポジウム開催等の連携を通じ、福島に想いを寄せる方々が集う拠点としての役割を果たしている。

(1) 館長：1名

- ・高村昇（令和2年度～）

長崎大学原爆後障害医療研究所 国際保健医療福祉学研究分野 教授

(2) 上級研究員：3名

- ・安田仲宏（令和2年度～）

福井大学附属国際原子力工学研究所 原子力災害・危機管理部門 教授

- ・関谷直也（上級研究員）（令和2年度～）

東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター 准教授

（※令和5年9月から教授）

- ・開沼博（上級研究員）（令和2年度～）

東京大学大学院情報学環 准教授

(3) 常任研究員：4名

(4) 客員研究員：27名

2節 常任研究員の取組

■葛西優香 KASAI, Yuka

1. 研究キーワード

地域、まちづくり、防災、伝統芸能、継承、社会心理学

2. 所属学会

日本災害情報学会、日本災害復興学会、日本自然災害学会、地域安全学会、
日本社会心理学会、地区防災計画学会

3. 令和4年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

神社再建、神楽・民俗芸能の再興と継承に関する調査・研究

3.2. 概要

本研究の目的は、「住民はいかに町に関わり続けているのか」という問いに対し、福島県双葉郡浪江町の神社再建、神楽・民俗芸能・盆踊りの継承プロセスにおける住民心理に着目し、住民と町との関わりが「ふるさと」の復興にいかに関与しているのかを明らかにすることである。避難生活を経た住民が町の中における活動を何から始めるのか始める個人の行動と心理がいかに関わり合って、動き出しているのかということに着目し、浪江町樋渡・牛渡行政区を主なフィールドとして調査を行った。

3.3. 研究内容

前項で述べた浪江町樋渡・牛渡行政区を選定し、その地域に関わる住民に神社再建、神楽・民俗芸能・盆踊りに関する調査を行った。2022年4月1日～2023年1月6日頃まで、樋渡・牛渡行政区で開催される、神楽・民俗芸能の練習と披露の場、盆踊りの準備と本番、片付け、その他、樋渡・牛渡行政区の住民が行う、清掃活動や芋煮会、年中行事に参加し、樋渡・牛渡行政区に関わる住民と接触を保ってきた。さらに本論を進めるにあたっては、行政区内の神社再建、神楽・民俗芸能・盆踊りの継承プロセスに関わりを示す住民、浪江町内の他地域で活動を行う住民などに別途インタビュー調査を実施した。調査の概要は以下の表1の通りである。

項目	内容
①目的	復興過程において、住民が町との関わりをどのように考えているのか、実態を把握すること
②地区	福島県双葉郡浪江町樋渡・牛渡行政区
③対象	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、②の地区に在住している住民：8名 ・避難先に居住するも②の地区で活動している住民：18名 ・浪江町内に居住し、②の地区以外に居住する住民：7名 ・避難先に居住するも浪江町内で活動している住民：8名
④期間	2022年4月11日～2023年1月6日
⑤方法	半構造化インタビュー
⑥内容	<ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災発生直後の行動から翌日の避難先 ・避難先に到着するまでの経緯 ・避難生活が継続する中での居住場所 ・居住場所が決まるまでの経緯 ・②地区や浪江町内で関わっていた活動 ・神社再建、神楽・民俗芸能・盆踊りと関わり 上記の項目において住民の行動とその背景にある感情や考えを重点的に聞き取り調査を行った。

表1 インタビュー調査概要

3.4. 成果

2022年4月の研究員就任以前から行政区長との関係性を築き、避難先から戻った住民、通い続けている住民、新しく住み始めた住民（移住者と呼ばれる）など多様な背景を抱える住民が生活し、居住者の実態が町役場も把握できない中であつたため、スノーボールサンプリング法で聞き取り調査対象者と接触を続けた。その結果、80名近くの住民に聞き取り調査を行うことができた。また、研究者自身も活動に参加することで参与観察を続けることができた。一方で、客観的な視点を保つために参加せずに調査のみを続けながら、住民活動のフィールドに通うことも同時に行った。

調査を行い得られた結果は、神社の再建、神楽・民俗芸能・盆踊りの再興に住民がまず動き、継承に向けて活動を続ける状況を把握することができた。その過程をエスノグラフィーで記述し、論文にまとめた。

また、本研究に関する口頭発表を日本災害情報学会第25回研究発表大会で、行い、「優秀発表賞」を受賞した。さらに、本調査で得られた知見をまとめ、東日本大震災・原子力災害伝承館を訪れた企業の研修時に、受講者に対して復興過程におけるまちづくりの要素として提示し、議論を行うことができた。

4. 令和4年度研究の全体像に対する認識・評価

調査対象者とは、適切な距離を取り、換気を行うなど社会環境に伴う留意点を遂行しながら調査を実施することができた。調査対象者の中で、より多様な住民の現状を捉えるために、避難先で生活を続ける、または、途中まで避難前に住んでいた町での活動に携わっていたが活動から離れた住民の聞き取り調査を実施していくことの必要性を感じている。

今年度は、本調査の結果を学位論文にまとめたので、次年度以降、論文投稿と書籍化を視野に執筆を続ける。

5. 令和5年度以降の研究計画

復興過程におけるまちづくりが何から動き出したのかを令和4年度に調査を続け、令和5年度には活動継承のプロセスを引き続き調査し、新しく生まれた活動の把握、また研究者自身が活動の一員となり調査を続けるアクション・リサーチの手法で双葉郡浪江町が遂行するまちづくりに対する調査を続ける。

具体的には、駅前開発のエリアマネジメントについて、また、自主防災組織の組成活動について、住民・町役場職員・民間企業などを含む多様なステークホルダーとの協働で調査を続ける。

6. 成果

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・日本自然災害学会災害調査補助「福島県双葉郡の神社・民俗芸能の再興現状調査」(2023年3月1日～2024年2月1日、研究代表者：葛西優香)

(2) 書籍(共著・分担執筆含む)

(3) 論文

- ・葛西優香、「まちのこし」のエスノグラフィー—福島県双葉郡浪江町での神社再建、神楽・民俗芸能・盆踊りの継承プロセスにおける住民心理と「ふるさと」の復興—、東京大学大学院学際情報学府修士論文、2023
- ・安本真也・葛西優香・富澤周・関谷直也、地震の被害想定をめぐるコミュニケーション—都民の意識と地震のしろうと理論—、『地域安全学会論文集』、41巻：pp. 95 - 105、2022【査読有】

(4) 口頭発表

- ・葛西優香・関谷直也、住民活動再興における祭祀の意味—福島県双葉郡浪江町の事例を通じて—、日本災害復興学会2022年度京都大会、(2022年10月1日～2日、京都大学)

- ・葛西優香・関谷直也、共同性再興における祭祀の意味～福島県双葉郡浪江町の事例を通じて～、日本災害情報学会第 25 回学会大会、(2022 年 10 月 8 日～9 日、日本大学)
 - ・葛西優香・関谷直也、復興過程における 20 代～30 代の継承意識—福島県双葉郡の神社再建、神楽・民俗芸能、盆踊りの継承プロセスを通じて—、2022 年度東日本大震災・原子力災害学術研究集会、(2023 年 3 月 17 日、コラッセふくしま)
- (5) ポスター発表
(なし)
- (6) 社会貢献活動等
1. 出前講義
 - ・「女性のための防災～自分と家族を守り、皆が助かるために何ができるか～」、特定非営利活動法人東京都中途失聴・難聴者協会、2022 年 9 月 3 日
 - ・「マインドスケープス事業におけるコンビーニング # 2 災禍からのレジリエンス」、双葉町産業交流センター、2022 年 9 月 4 日
 - ・「地元学」、文教大学、2022 年 10 月 5 日
 - ・「リアル研究員と話そう! vol. 2 @ 双葉みらいラボ」、福島県立ふたば未来学園、2022 年 10 月 20 日
 - ・「浪江で体感していること」、関東学院大学、2022 年 10 月 30 日
 - ・「UR 都市機構職員研修」、独立行政法人都市再生機構、2022 年 10 月 31 日
 - ・職員研修「復興過程のエリアマネジメント」、浪江町役場、2022 年 12 月 16 日
 - ・防災士フォローアップ研修「防災士の町における役割」、特定非営利活動法人日本防災士機構、2023 年 2 月 18 日、オンライン
 - ・「大学生防災フォーラム」、愛知工業大学、2023 年 3 月 8 日
 2. 講演
 - ・公益財団法人東京都中小企業振興公社、「安全・防災」分野別会議におけるセミナー講師 (2022 年 11 月 24 日)
 - ・東京都葛飾区、「女性のための防災講座」講師 (2022 年 11 月 14 日)
 - ・日本学術会議、公開シンポジウム「東日本大震災に係る食料問題フォーラム 2022—原子力災害 11 年の総括と福島県農林水産業の復興—」パネリスト (2022 年 11 月 19 日、双葉町産業交流センター)
 3. 委員
 - ・日本災害復興学会企画委員 (2023 年 4 月～)
 - ・UR 都市機構防災専門員 (2020 年 12 月～)
 4. 寄稿
 - ・「町の継承～変えられないものの背景にある住民心理を問う～」、『日本災害情報学会 New Letter』No. 93、p. 7、2023 年 4 月
- (7) その他
1. メディア報道
 - ・文化放送 (ラジオ) 「防災アワー」(2022 年 8 月 7 日)

- ・福島民報「地域の防災力向上へ奔走 震災・原子力災害伝承館の葛西さん 福島県浪江町に移住」(2022年10月26日)
- ・茨城放送(ラジオ)「防災のチカラ」(2023年1月6日)
- ・テレビュー福島『一生懸命生きてきた。継続できるように備えよう』大阪出身女性が福島移住 2つの震災経て『防災』伝える」(2023年1月12日)
- ・「福島民友被災地の調査・研究報告 伝承館常任研究員、県を表敬」(2023年2月11日)
- ・福島民報「伝承館研究員が知事訪問 活動報告、復興推進誓う」(2023年2月11日)
- ・福島民友『なみえ寺子屋』始動 町民と移住者がタッグ、伝統芸能を継承」(2023年3月7日)
- ・読売新聞「地域のつながり 防災に 伝承館常任研究員 浪江に移住し奮闘」(2023年3月8日)
- ・文春オンライン『人の営みがない。音も聞こえない…』防災組織を研究する36歳女性が、福島県浪江町に移り住んだわけ 3.11から12年、あの震災の語り部たち #1」(2023年3月11日)
- ・福島放送「県政広報番組チャレンジふくしまナビ：伝承館研究活動報告会」(2023年3月31日)
- ・浪江町「震災遺構浪江町立請戸小学校ホームページ」インタビュー掲載(2023年2月15日)
- ・浪江町「浪江町移住定住ガイドブック」インタビュー掲載(2023年3月)

■ 静間健人 SHIZUMA, Taketo

1. 研究キーワード：

広域避難者、災害時要配慮者、災害伝承施設、社会心理学的アプローチ

2. 所属学会：

日本リスク学会、日本応用心理学会、日本社会心理学会、日本災害復興学会、日本災害情報学会、日本自然災害学会、地区防災計画学会

3. 令和4年度の調査・研究の内容

3.1. 研究テーマ

ケイパビリティ・アプローチの枠組みによる災害伝承施設来館者に関する基礎研究及び広域避難者に関する基礎調査

3.2. 概要

2011年に発生した東日本大震災を契機として、教訓を継承することの重要性があらためて注目されており、東北の被災地域には数多くの災害伝承施設が設置されている。

また、福島第一原発事故は、多数の長期広域避難民を発生させている。避難による累積的被害を軽減するために、国、県、市町村などによって情報提供支援が行われている。

災害伝承施設を訪れた人が展示等から受け取る情報や避難中に活用できる情報は、個人の置かれた環境、知識、社会的リソース等に依存すると考えられるため、ケイパビリティ・アプローチの枠組みを援用し、調査・研究を行う。

3.3. 研究内容

1) 来館者研究

災害伝承施設等を通じて災害の記録や教訓を継承し、災害に備えることが求められているが、何を教訓として継承していくのか、また、どのようにして継承するのか、ということ結論づけることは容易ではない。しかしながら、災害伝承施設を訪れた人たちの体験したことから、彼らが何を教訓として受け取ったのかを把握することは可能である。令和4年度は、東日本大震災・原子力災害伝承館の来館者に対して実施されている「一般来館者アンケート」及び「来館者ノート」の分析を行った。

2) 広域避難者研究

広域避難者に向けて、福島県から「避難者向けダイジェスト版新聞」が送られている。この新聞は、地元を離れた避難者たちの情報源の1つである。伝えられていた情報を整理・分析することは、避難者が福島で起きたことを把握できたのかを検証する上で重要である。令和4年度は、避難者向けダイジェスト版新聞の保管場所を特定する作業を行った。

3.4. 成果

令和2年度と令和3年度に、東日本大震災・原子力災害伝承館に来館した人のうち、アンケートに回答があり、かつ「意見や気づき」の自由記述の設問に回答があったデータを分析の対象とした。来館者の自由記述には、展示に対するネガティブな意見とポジティブな意見があることが明らかとなった。また、居住地が福島県内か、県外かの違いによって回答に違いがみられるか分析したところ、県内では「当時」「思い出す」「もう少し」の語が頻出していた。一方、県外の人で「知る」「良い」が頻出していた。

東日本大震災・原子力災害伝承館の開館日から2022年7月22日までの期間にメッセージノート（来館者ノート）に寄せられたメッセージを分析の対象とした。メッセージ内容を読み、いくつかのカテゴリに分類することを試みた。時系列順に自由記述を整理した結果、「災害に関する知識の取得」「伝承していくことの必要性の認知」「震災当時の記憶想起」「復興応援」「展示に対する満足」「展示に対する不満」に分類された。同じ展示を見学した人であっても、展示にポジティブな意見を持つ人もいれば、ネガティブな意見を持つ人もいた。

4. 令和4年度研究の全体像に対する認識・評価

来館者研究に関しては、「一般来館者アンケート」は令和3年度末までの回答を、「来館者ノート」はデータ収集時点までを、それぞれ分析し、学会での発表を実施できた。回答者の属性等をふまえた分析を十分に行えなかったことは、次年度の課題である。また、アンケートとノート共に、展示に対するネガティブな意見が見受けられたが、ポジティブな意見の方が多くを占めていた。すべての人が満足する展示を行うのは困難であるが、「ノートを活用した両論併記」「他施設との連携」を行うなど、何らかの形で情報を示す必要があると考えられる。

広域避難者研究に関しては、「避難者向けダイジェスト版新聞」の所蔵場所を特定するのに時間を要したが、令和4年度分は福島県立図書館に、それ以前のものの一部は東日本大震災・原子力災害伝承館に保管されていることを把握することができた。

5. 令和5年度以降の研究計画

令和5年度は、来館者研究に関して、「一般来館者アンケート」については令和4年度末までのデータを含めた分析を行う。その際に、令和4年度に十分検討できなかった回答者の属性等をふまえた分析を行うとともに、アンケートの配布方法の違いも考慮して分析に取り組む。

広域避難者研究に関して、「避難者向けダイジェスト版新聞」の見出しを用いた分析から、避難者がどのような情報を把握できたのか明らかにする。また、新聞以外の情報媒体の分析も併せて行う。具体的には、「ふくしまの今が分かる新聞」「福島県の広報誌」「福島県内の市町村の広報誌」を対象とする。また、これらの情報がどのような経緯で、避難者に届けられることとなったのか等を明らかにするために、関係者にヒアリング調査等を行う。

6. 成果

(1) 外部研究費の獲得状況

(なし)

(2) 書籍（共著・分担執筆含む）

- ・ 静間健人・土田昭司、「第15章 災害と応用心理学 Topic 20 日本における防災の実態と防災関与の研究」、『応用心理学ハンドブック』福村出版：pp. 772-773、2022（分担執筆）

(3) 論文

- ・ 土田昭司・静間健人・浦山郁、新型コロナウイルス感染症流行ならびにそのワクチンに対する2021年10月までの市民の対応の変化、リスク学研究、32巻1号：pp. 43-56、2022（分担執筆）【査読有】
- ・ 丹波史紀・安本真也・静間健人・関谷直也・小山良太・服部正幸、東京電力福島第一原子力発電所事故にともなう長期避難の実態—2021年第

3回双葉郡住民実態調査一、東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編、39巻：pp.169-237、2022（分担執筆）

(4) 口頭発表

- ・ 静間健人、東日本大震災・原子力災害伝承館の認知度調査—調査・研究部門について—、地域安全学夏の学校（2022年8月19日、神奈川大学）
- ・ 静間健人、支援調査と支援記録の定量的分析（西日本豪雨）、日本災害復興学会2022年度京都大会（2022年10月1日、京都大学）
- ・ 静間健人、来館者アンケートの分析から見る震災伝承施設体験、日本リスク学会第35回年次大会（2022年11月13日、京都大学）
- ・ 静間健人・土田昭司・浦山郁、コロナ禍において重視する生活領域と諸活動の関連、日本リスク学会第35回年次大会企画セッション（2022年11月13日、京都大学）

(5) ポスター発表

- ・ 静間健人、災害伝承施設来館者の想いの変化—自由記述の分析—、日本応用心理学会第88回大会（2022年9月18日、京都工芸繊維大学）

(6) 社会貢献活動等

1. 出前講義

- ・ 「要配慮者と避難」リアル研究員と話そう！vol.1@双葉みらいラボ、福島県立ふたば未来学園、2022年7月22日

(7) その他

1. メディア報道

- ・ 福島民友「『知の交流拠点』へ一歩 双葉・伝承館開館2年、研究事業本格化（2022年9月19日）
- ・ 福島民友「被災地の調査・研究報告 伝承館常任研究員、県を表敬」（2023年2月11日）
- ・ 福島民報「伝承館研究員が知事訪問 活動報告、復興推進誓う」（2023年2月11日）

■山田修司 YAMADA, Shuji

1. 研究キーワード

哲学・倫理学、科学社会学・科学技術史、リスク、防災、移動

2. 所属学会

科学技術社会論学会、日本東アジア実学研究会、日本科学哲学会、東北都市学会、日本都市学会、応用哲学会、東北哲学会、東北大学哲学研究会

3. 令和4年度の調査・研究

3.1. 研究テーマ

科学技術社会論の枠組みによる「教訓の継承」の展開に向けた基礎調査

3.2. 概要

「教訓の継承」は伝承館の主要4事業のなかで中核的な概念／手法を占めている。継承される教訓の対象とその継承のあり方についての考察は、類を見ない複合災害の理解に依存すると考えられる。そこで、継承されるべき教訓を抽出・体系化するにあたり、科学・技術と関わりのなかで複合災害のさなかの社会を理解するために、科学技術社会論(STS)の枠組みを応用した調査・研究を行う。

3.3. 研究内容

現地調査と文献調査を併行して実施し、資料・文献の収集および仮説形成にむけた基礎調査を本年度では行い、STSという大枠で系統化しつつ、主に次の2つの軸で進めた。(1)福島第一原子力発電所の事故直後からの「避難」によって日常の生活が、意図せざるかつ望まぬかたちで、大きな変化をもたらしている点が福島県にとって他の地域と比べて顕著といえる。複合災害の特徴として広域かつ長期にわたる「避難」がもたらす社会生活に注目して、避難者(避難先での定住者を含む)へのヒアリング、および社会学を中心に社会科学の国内外の文献を収集しつつ理論的精査を行なった。(2)継承される教訓を「知識」と仮設し、博物館学を含むミュージアム・スタディーズや関連する哲学の文献を収集しつつ理論的精査を行い、あわせて東北地方の震災遺構や震災伝承施設の現地調査を実施した。

3.4. 成果

2つの軸から、STSの枠組みを応用しつつ、ヒト・モノ・情報などのさまざまな移動に注目して社会を捉える「モビリティーズ・スタディーズ」の有用性を確認した。そのなかで、広域かつ長期にわたる「避難生活」によって非日常と日常との明確な線引きを「誰が」・「誰にとって」・「どのように」することの困難という課題を指摘した。また「教訓の継承」にはハコモノであっても多様な人々の経験や記憶の交流がなされる移動によって可能であり、同時に移動の公共的なあり方が不可欠であるという理論的モデルを提示した。そして、被災地の立地施設のあり方について避難訓練とリスク管理の観点の関連を示した。

4. 令和4年度研究の全体像に対する認識・評価

コロナ禍もあって対面での聞き取り調査の制限や、新規の調査対象者との選定・関係構築等が当初の計画より遅れているが、着任以前からの対象者との継続した面接調査を進めることができた。理論研究に関しては計画していた学会発表と論文の投稿を実施でき、査読論文の採択にこぎつけることができた。また研究会の開催を通じて、新たな知見の獲得や外部の研究者との共同研究へ弾みをつけることができた。

5. 令和5年度以降の研究計画

令和5年度はコロナ禍による種々の制限も解除されると期待される。社会科学的な「移動 mobilities」概念をキーワードに、以前からの避難者調査を継続しつつ復興公営住宅や双葉郡での実地調査、震災伝承の生活史の把握に着手するなどして社会動態の把握および仮説の構築と検証に努める。また並行して移動のインフラについての倫理的条件を探るため、技術哲学を基盤に理論研究を進める。これらは学会報告や論文投稿、外部研究者との共同研究などを通じて学術成果の公開を行う。さらにそうした学術的な蓄積や成果を、伝承館事業の展示や研修への反映等、プログラム開発の具体化へ取り組む。

6. 成果

(1) 外部研究費の獲得状況

- ・公益財団法人上廣倫理財団令和4年度研究助成「道徳の物質的転回による設計論の構築に向けた技術哲学的考察」（2023年3月～2024年2月、研究代表者：山田修司）

(2) 書籍（共著・分担執筆含む）

（なし）

(3) 論文

- ・山田修司、防災の工学化と政治性、東北都市学会研究年報、19・20巻：pp. 67-83、2022【査読有】
- ・山田修司、(2023)「集客施設による避難訓練の取組みと観光危機管理の観点からの考察、東北地域災害科学研究、59巻：pp. 135-140、2023
- ・山田修司、震災伝承施設における資料化とその概念的検討、日本都市学会年報、56巻【採択・掲載決定】【査読有】

(4) 口頭発表

- ・山田修司、震災伝承施設における資料化とその概念的検討：モビリティーズの観点による伝承施設の意義、日本都市学会第69回大会（2022年10月30日、名古屋学院大学）
- ・山田修司、移動経験の不確実性に着目した避難の検討、東北都市学会2022年度大会（2022年11月12日、石巻専修大学）
- ・山田修司、集客施設による避難訓練の取組みと観光危機管理の観点からの考察、令和4年度東北地域災害科学研究集会（2022年12月27日、弘前大学）

(5) 社会貢献活動等

1. 出前講義

- ・「哲学が交わるとき」リアル研究員と話そう！vol.2@双葉みらいラボ、福島県立ふたば未来学園、2022年10月20日（6）その他

2. メディア報道

- ・福島民友「『知の交流拠点』へ一歩 双葉・伝承館開館2年、研究事業本格化」（2022年9月19日）

- ・福島民友「哲学で復興ひもとく 双葉・伝承館開館2年、被災者の思い言語化へ」(2022年9月19日)
 - ・福島民友「被災地の調査・研究報告 伝承館常任研究員、県を表敬」(2023年2月11日)
 - ・福島民報「伝承館研究員が知事訪問 活動報告、復興推進誓う」(2023年2月11日)
 - ・福島放送「県政広報番組チャレンジふくしまナビ：伝承館研究活動報告会」(2023年3月31日)
3. 研究会の開催
- ・研究ワークショップ：災害の社会認識論と災害の語り (2022年9月3日、双葉町産業交流センター)

■青砥和希 AOTO, Kazuki

1. 研究キーワード
地域アイデンティティ、教育復興、サードプレイス、人文地理学、教育社会学
2. 所属学会
コミュニティ政策学会
3. 令和4年度の調査・研究
- 3.1. 研究テーマ
東日本大震災・原子力災害における教育復興—複数の主体による地域アイデンティティの再構築過程の研究—
4. 令和4年度研究の全体像に対する認識・評価
5. 令和5年度以降の研究計画
6. 成果
 - (1) 外部研究費の獲得状況
 - (2) 書籍（共著・分担執筆含む）
 - (3) 論文
 - ・青砥和希、震災復興・地方創生下の子どもの居場所におけるコーディネーターの役割—福島県白河市での実践報告を題材に一、小児の精神と神経、62巻4号：p. 315-318、2023
 - (4) 口頭発表
 - (5) ポスター発表
 - (6) 社会貢献活動等
1. 出前講義
 - ・「NPO論」、宇都宮大学地域デザイン科学部、2022年6月9日
 - ・「人間関係論」、福島学院大学短期大学部、2022年7月14日

2. 交流活動等

- ・第127回日本小児精神神経学会、「シンポジウム2」講師（2022年6月26日、白河文化交流館コミネス）
- ・第44回全国公民館研究集会・令和4年度東北地区社会教育研究大会・第67回東北地区公民館大会福島大会、「現代的課題の解決に向けた社会教育の役割」講師（2022年10月14日、いわき市文化センター）
- ・わかものまちなみサミット2022、全体会登壇（2022年11月6日、京都市中央青少年活動センター）
- ・福島県立相馬総合高等学校、「総合的な探究の時間 課題研究校内発表会」モデレーター（2022年12月8日）
- ・福島県教育委員会、「令和4年度教育フォーラム」アドバイザー（2022年12月23日、オンライン開催）
- ・伝承館、「伝承と教育を考える公開対談「空白を考える」」（2023年1月16日、2月17日、3月14日、福島県立ふたば未来学園）

3. 委員会

- ・福島県総合計画審議会委員

3節 報告会等

1. 調査・研究部門活動報告会

伝承館の調査・研究部門の活動成果を一般の方向けに発信することを目的として、館長、上級研究員、常任研究員が令和4年度の活動内容を発表した。

日時：令和5年3月18日（土）9：20～11：10

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館研修室

発表者	活動内容
館長 高村昇	「福島における環境放射能、放射線リスクコミュニケーションとリスク認知の変遷」
上級研究員 安田仲宏	「放射線防護行動の検証、専門家・作業員への聞き取り、ウクライナ戦時下での原子力防災活動と日本における原子力防災への反映」
上級研究員 関谷直也	「東京電力福島第一原子力発電所事故に関連したリスク認知に関する国際比較研究」
上級研究員 開沼博	「ハコにヒトを流し込むために」
常任研究員 青砥和希	「福島県における高校生向け災害伝承プログラムの比較検証」
常任研究員 葛西優香	「「まちのこし」のエスノグラフィー —福島県双葉郡浪江町での神社再建、神楽・民俗芸能・盆踊りの継承プロセスにおける住民心理と「ふるさと」の復興—」
常任研究員 静間健人	「原子力災害の伝承施設における来館者体験の事例分析」
常任研究員 山田修司	「移動のなかの災害」

2. 有識者懇談会調査・研究専門部会

調査・研究事業の質の確保・向上を図るため、専門的な見地からの意見、助言を得ることを目的として、東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会に調査・研究専門部会を設置した。

日時 令和5年3月18日（土）11:20～12:00

場所 東日本大震災・原子力災害伝承館研修室

委員構成（第1期 令和5年3月～令和7年3月）

所属・役職	氏名
福島大学共生システム理工学類 客員教授	小沢 喜仁
福島大学共生システム理工学類 教授	川崎 興太
福島県立医科大学総合科学教育研究センター 教授	後藤 あや
東洋大学国際学部国際地域学科 教授	藤本 典嗣



調査・研究部門活動報告会



有識者懇談会調査・研究専門部会

3. 東日本大震災・原子力災害 学術研究集会

東日本大震災及び原子力災害の研究者等の学術交流と情報交換を目的として、初となる「東日本大震災・原子力災害 学術研究集会」を開催した。

1日目（エクスカージョン）	2日目（研究報告会）
○日時：令和5年3月16日（木）	○日時：令和5年3月17日（金）9:50
○場所：東日本大震災・原子力災害伝承館～震災遺構浪江町立請戸小学校～中間貯蔵施設	～16:40
○参加者：57人	○場所：コラッセふくしま
	○参加者：発表73件、参加者166人

4. 福島県知事に活動内容を報告

日時：令和5年2月10日（金）

常任研究員4名が内堀雅雄福島県知事を訪問し、研究活動を報告した。高村昇館長、福島イノベーション・コースト構想推進機構 戸田専務理事が同席した。



4 節 福島国際研究教育機構（F-REI）との連携

1. F-REI 産学官連携セミナーに高村館長が登壇

日時：令和5年1月13日（金）

場所：虎ノ門ヒルズ森タワー4階ホールB

令和5年4月に設立される福島国際研究教育機構の産学官連携に向けた初のセミナーが東京都で開催された。

F-REIの第5分野「原子力災害に関するデータや知見の集積・発信」のパネリストとして高村館長が登壇し、福島の複合災害の教訓を世界の防災・減災のガイドライン作成などに活かしていくため、国際機関との連携や人材育成が必要であり、F-REIと連携して取り組むことを述べた。

2. F-REIの国際シンポジウムで館長、上級研究員が講演

日時：令和5年3月14日（火）

場所：Jヴィレッジ

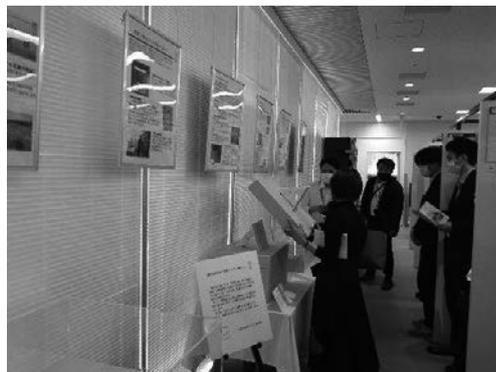
F-REI第5分野の先行研究として、「原子力災害に関するデータや知見集積・発信に関する国際シンポジウム」（主催：経済産業省）が開催され、高村館長と上級研究員が講演を行った。

5 節 その他

1. 人と防災未来センター視察研修

日時：令和4年6月14日（火）

研究活動等の参考とするため、東日本大震災・原子力災害伝承館の常任研究員を含む職員が兵庫県神戸市の人と防災未来センターに視察研修を行った。



7章 イベント・広報

1 節 イベント

1. セタイベント

日時：令和4年6月22日（水）～7月11日（月）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホール

来館者に福島へのメッセージや願いを短冊に書いていただき、飾ることで、震災・復興について考える契機となるよう「セタイベント」を開催した（イベント期間の後半に双葉町両竹地区から採取した竹を使用した）。7月7日には、浪江町立なみえ創成小学校の生徒17名を招待し、短冊の飾りつけを行った。



2. 子ども向け展示解説会

日時：令和4年7月31日（日）、8月7日（日）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館

参加した親子と常設展示の各ゾーンを回り、展示物について解説するとともに、展示物を展示ケースから出して現物を触るなどの体験を行った。



3. 被災地域のあゆみ・魅力発信事業

日時：令和4年9月23日（金・祝）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館1階エントランスホールほか

福島県と連携して、県内の震災伝承施設を紹介するパネル展示や、防災に関するサイエンスショー&ワークショップを開催した。

※ 伝承館に隣接する特設会場で開催された「ふたばワールド2022」（双葉地方広域圏市町村組合、双葉町主催）と連携し、同時開催とした。



4. 夏休み子ども実験教室

日時：令和4年7月30日（土）、8月6日（土）、8月11日（木・祝）、
9月23日（金・祝）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館

東日本大震災の発端となった地震とそれに伴って発生した津波のメカニズムについて子ども向けのイベントを開催した。



5. 3.11メモリアルイベント

日時：令和5年3月11日（土）

場所：東日本大震災・原子力災害伝承館

震災から12年を迎えるに当たり、東日本大震災および原子力災害で犠牲となった方々を悼み、震災の記憶や福島のことを発信することを目的にメモリアルイベントを福島県と連携して開催した。

<トークセッション> 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階研修室

第1部「高校生と考える震災伝承」10:00～11:40

原町高等学校 2年 佐藤 菜々香さん

白河高等学校 2年 小山田 理奏子さん

田島高等学校 1年 星 一瑠羽さん

ファシリテーター 東日本大震災・原子力災害伝承館 常任研究員 青砥和希

第2部「震災12年の軌跡とこれから」13:30～14:30
 カニング竹山氏
 東日本大震災・原子力災害伝承館 館長 高村 昇

メモリアルイベントチラシ



第一部



第二部



<追悼イベント>

17:00 ～17:30	ピアノ演奏 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階エントランスホール ピアニスト 津山 博子氏
17:30 ～18:00	フルート演奏 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 1階エントランスホール フルーティスト 穂刈 由美子氏
18:00～	追悼花火 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 屋外

ピアノ演奏



追悼花火



<関連イベント>

17:00 ～20:00	キャンドルナイト 場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 アーカイブ広場
17:30 ～20:00	ただいま おかえり双葉町キャンドルナイト 場所：JR双葉駅駅前広場 日時：令和5年3月10日（金）・11日（土）

2節 広報

1. イベント出展

伝承館を広く多くの方に知っていただくとともに、福島県の「今」について正しい情報を発信するため、県内外の防災イベント・風評払拭イベントに出展した。

イベント名	日時	場所
RESCUE EXPO in 立川	令和4年8月25日（木） ～26日（金）	アリーナ立川立飛
ふくしまフェスタ	令和4年10月1日（土） ～2日（日）	三井アウトレットパーク 木更津ピアストリート
ぼうさいこくたい2022	令和4年10月22日（土） ～23日（日）	HAT神戸を中心とするエリア
浜フェス2022	令和4年11月5日（土） ～6日（日）	六本木ヒルズアリーナ
そなえる・ふくしま2022	令和4年12月11日（日）	ビッグパレットふくしま
ふくしまの高校生が伝える3.11と私	令和5年3月5日（日）	東京国際フォーラム

2. 情報発信

企画展やイベント、来館15万人到達時など、積極的にプレスリリースを行い、報道機関の取材につなげている。

7章 イベント・広報・視察対応

SNS (Instagram、Facebook、Twitter) を活用し、企画展やイベント、要人・著名人の来館など積極的に情報を発信した。また、令和3年度末に完成した伝承館内を紹介する 360° 動画を YouTube で公開した。



来館者 15 万人到達 (R5. 10. 19)



伝承館紹介 360° 動画

8章 東日本大震災・原子力災害伝承館の 運営に関する有識者懇談会

1 節 東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会

伝承館が掲げる基本理念を着実に実現するとともに、伝承館のより良い管理運営と良質なサービス提供を図るため、地元及び各分野の専門的な見地からの意見や助言を得ることを目的として、「東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会」を令和3年3月に設置している。

なお、伝承館の調査・研究事業の質の確保・向上を図るため、専門的な見地からの意見助言を得ることを目的として、令和5年3月に有識者懇談会に調査・研究専門部会を設置した（調査・研究専門部会については、「6章 4 節 2. 有識者懇談会調査・研究専門部会」に記載）。

1. 令和4年度

- (1) 日時 令和5年3月23日（木）13：30～15：30
- (2) 場所 東日本大震災・原子力災害伝承館 1階 研修室
- (3) 議題 調査・研究専門部会実施報告、今年度の運営及び活動実績、前年度懇談会でのご意見への対応等、来館者アンケート結果、来年度の主な事業計画、意見交換

2. 令和3年度

- (1) 日時 令和4年3月28日（月）9：30～11：30
- (2) 場所 東日本大震災・原子力災害伝承館 1階 研修室

3. 令和2年度

- (1) 日時 令和3年3月19日（金）15：30～17：30
- (2) 場所 東日本大震災・原子力災害伝承館 1階 研修室

4. 委員名簿（令和5年3月現在）

所属・役職	氏名	備考
福島大学 共生システム理工学類 客員教授	小沢 喜仁	学識経験者
福島大学 共生システム理工学類 教授	川崎 興太	学識経験者
福島大学 教育推進機構 准教授	前川 直哉	学識経験者
双葉町長	伊澤 史朗	地元代表
NPO法人富岡町 3.11 を語る会 代表	青木 淑子	地元代表
福島県教育委員会 教育次長	丹野 純一	教育関係者
公益財団法人福島県観光物産交流協会 理事長	守岡 文浩	教育旅行／研修関係者
福島民報社 取締役郡山本社代表	鞍田 炎	その他（報道）
福島民友新聞社 取締役編集局長	小野 広司	その他（報道）
クラシノガッコウ月とみかん 代表	大場 美奈	地元代表

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に 関連した新聞記事

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

令和4年度、東日本大震災・原子力災害伝承館の活動は、新聞社等に多数取り上げられた。伝承館に関係している新聞記事を抜粋し、一覧として紹介する。

また、伝承館の活動のうち、新聞社から許可を得た記事の写しを紹介する。※掲載記事見出し（または概要）に○を付した新聞記事（WEB版では省略）

（4月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
4	12	火	福島民報	10	○町民語り合う場に

（5月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
5	2	月	福島民友	2	「証言あの時」伝承館に
5	17	火	朝日新聞	18	「山へ走れ」校内放送聞き一直線
5	26	木	福島民報	15	本県復興の現状確認 知事同盟 原発や伝承館視察
5	26	木	福島民友	4	伝承館や第1原発視察 知事同盟 復興現状理解深める
5	27	金	福島民報	3	池上彰さん講師に相双地方取材
5	28	土	福島民報	17	交流イベントふたばワールド

（6月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
6	4	土	福島民報	19	○被ばく医療の人材育成
6	4	土	福島民友	3	○震災の記憶 児童へ
6	12	日	福島民報	19	復興、まちづくり学ぶ 県内高校生双葉郡の施設巡り研修
6	12	日	福島民友	2	浜通りの復興、自ら取材 高校生交流事業の事前研修
6	26	日	福島民報	20	復興への願い短冊に込め
6	27	月	福島民友	8	震災伝える写真や動画 三春 伝承館が出張パネル展

（7月分）

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し（または概要）
7	2	土	福島民報	2	被災地の復興状況確認 中央省庁新規職員、本県訪問
7	5	火	福島民友	12	復興への願い短冊に 11日まで双葉の伝承館
7	8	金	福島民友	19	○願いかなえ なみえ創成小児童が七夕飾り
7	10	日	福島民報		葛尾復興の歩み紹介 震災前の街並みなど展示
7	12	火	福島民友	12	「命と心守る行動」大事 被災の教訓講話や絵本朗読
7	16	土	福島民友	2	松野官房長官が双葉視察
7	16	土	福島民報	2	双葉の伝承館など視察 松野官房長官が来県
7	26	火	福島民報	15	原発事故時の状況を学ぶ 都内の生徒モニターツアー
7	27	水	福島民友	10	震災教訓学ぶモニターツアー
7	28	木	福島民報	2	被災4町の復興学ぶ
7	29	金	福島民友	3	子ども記者 被災地取材 ジャーナリストスクール開校

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

7	29	金	福島民報	3	小中高生が復興取材 ジャーナリストスクール開校
7	31	日	福島民報	5	震災前の光景 語り継ぐ

(8月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
8	1	日	福島民報	5	世界中のアーティスト 双葉に集結
8	11	木	福島民報	17	○双葉の伝承館 企画展 模型で仕組み解説
8	15	月	福島民報	11	○復興発信へ表現学ぶ ふくしまナラティブ・スコラ
8	18	木	福島民報	13	○大熊復興の歩み紹介 双葉の伝承館でパネル展
8	19	金	長崎新聞		放射線被ばくと復興学ぶ
8	19	金	福島民報	2	中高生ら双葉で映像制作始める 浜通りプロジェクト
8	19	金	福島民友	3	中高生、双葉舞台に映画 脚本作りやロケハン
8	21	日	福島民報	2	ミス・ワールド日本ファイナリスト 双葉郡で復興状況に理解
8	27	土	福島民報	15	長崎大のウクライナ人学生 平和の重要性考える
8	27	日	福島民友	15	長崎大のウクライナ避難学生 本県被災地を視察
8	30	火	福島民報	11	復興の現状を理解 中国人留学生双葉、浪江巡る

(9月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
9	3	土	福島民報	2	経済同友会が被災地視察 復興やBCPで意見交換
9	6	火	福島民報	13	震災学び復興考えよう
9	8	木	福島民友	8	中高生向け復興研究講座
9	13	火	福島民報	2	語り部ネット発足へ・一堂集い意見交換
9	14	水	福島民報	2	復興祈念公園―伝承館 周遊性向上へ橋新設
9	16	金	福島民報	3	○震災と原発事故の教訓後世に伝える
9	17	土	福島民友	3	東大大学院生がまちづくり提言
9	17	土	福島民報	3	避難3町復興研究成果を発表
9	19	月	福島民友	1	○「知の交流拠点」へ一歩
9	19	月	福島民友	23	○哲学で復興ひもとく

(10月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
10	6	水	福島民報	13	教訓の大切さ理解
10	16	日	福島民報	2	中高生 震災テーマに研究
10	20	木	福島民報	18	○来館者 15万人突破
10	20	木	福島民友	20	○震災伝承館来場 15万人
10	26	水	福島民報	19	○浪江の防災向上 住民と
10	28	金	福島民報	13	被災地巡り現状学ぶ
10	31	月	福島民報	11	災害の教訓 後世に 長崎市長、双葉の伝承館訪問

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

10	31	月	福島民友	22	伝承館、原爆語り部交流
----	----	---	------	----	-------------

(11月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
11	4	金	福島民友	4	若手の語り部意見交わす
11	7	月	福島民報	2	震災語り部連携へ 県内ネットワーク会議発足
11	7	月	福島民友	2	震災の伝承強化 連携 語り部ネットワーク発足
11	7	月	福島民報	11	悲劇の記憶 次世代に 長崎平和推進協と双葉・伝承館語り部連携強化へ
11	8	火	福島民報	15	双葉の復興状況学ぶ
11	11	金	福島民友	20	〇教訓伝える中核拠点
11	25	金	福島民友	4	「福島学ぶことが多い」EU関係者に訪問呼びかけへ

(12月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
12	11	日	福島民友	4	命守る大切さ心に刻む
12	28	水	河北新報		福島・双葉原子力災害伝承館 風評被害解消正確な発信で

(1月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
1	6	金	福島民友	4	風評の原因や実態解説
1	22	日	福島民報	11	対話の重要性訴える
1	22	日	福島民友	2	「言葉・記憶」がテーマ 伝承館開沼氏と玄侑氏が対談
1	22	日	福島民友	2	震災伝承施設の職員が活動報告
1	29	日	福島民報	2	粘り強い知力 日曜論壇 玄侑 宗久
1	29	日	福島民友	2	SNSで本県風評払拭 県が外国人招きツアー
1	29	日	福島民報	3	県内の今 発信へ観光 あすまで海外出身インフルエンサー

(2月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
2	11	土	福島民友	3	〇被災地の調査・研究報告 伝承館常任研究員、県を表敬
2	11	土	福島民報	15	〇伝承館研究員が知事表敬 活動報告、復興推進誓う
2	12	日	福島民友	3	伝承の意義語り合う
2	20	月	福島民報	2	復興へ研究成果発表 福島学カレッジ最終報告会
2	20	月	福島民友	2	「処理水の授業必要」福島学カレッジ中高生が発表

(3月分)

月	日	曜日	新聞社名	面	掲載記事見出し (または概要)
3	6	月	福島民友	4	手話で伝えたい震災体験 障害ある人の活躍の場に
3	10	金	福島民友	3	〇被災体験記後世に 伝承館、手記や日記を収集
3	10	金	福島民報	3	〇あすから被災体験収集 風化防止へ双葉の伝承館
3	10	金	長崎新聞	22	長崎大のウクライナ避難学生 平和と復興へ強い思い
3	10	金	福島民報	3	「今の居住地で今後も生活」7割

9章 東日本大震災・原子力災害伝承館に関連した新聞記事

3	10	金	福島民友	1	双葉郡3分の1移住者ら
3	10	金	福島民友	3	除染土「早期に県外」7割
3	11	土	福島民友	23	○古里への思いを実感
3	12	日	福島民友	4	各地で追悼行事「福島を災害教育拠点に」
3	12	日	福島民報	3	「震災終わってない」双葉県メモリアルイベント 復興支援 高校生が活動発表
3	12	日	福島民友	22	見つめる 海を
3	12	日	福島民友	23	記憶を言葉に、伝えていく
3	12	日	福島民報	27	未来つくる若い力 記憶、経験を言葉に
3	14	火	福島民友	5	自らの経験を言葉にしよう
3	18	土	福島民報	2	○双葉の伝承館、今年度来館者数7万5千人を突破
3	18	土	福島民友	12	災害と科学技術教訓は 伝承館常任研究員と有識者
3	19	日	福島民友	5	○原子力災害巡る研究成果を発表
3	19	日	福島民報	2	○伝承館研究員が活動内容を報告
3	24	金	福島民友	2	いわきFCと伝承館連携し誘客取り組み
3	26	日	福島民報	2	○伝承館の運営在り方に意見 有識者懇談会

冊子版では、このあと68ページから78ページにかけて新聞記事が掲載されていますが、WEB版では、著作権の関係で該当ページを削除しております。ご了承ください。

《付録》
令和2・3年度 事業実績

令和2年度

1. 利用者状況

(1) 来館者数

令和2年度実績：43,750人（団体10,097人、個人33,653人）

※令和2年9月20日～令和3年3月31日

(2) VIP等の視察対応

菅総理大臣を始め、政府、自治体関係者など様々な要人が当館を視察した。

- ・政府関係者 32件 256人
- ・自治体関係者 24件 169人
- ・その他（民間企業幹部等） 22件 131人

※随行者を含む。

2. 展示

(1) 展示

- 発災から復興へ進む福島の姿を5つのテーマ【1.災害の始まり ⇒ 2.原子力発電所事故の対応 ⇒ 3.県民の想い ⇒ 4.長期化する原子力災害の影響 ⇒ 5.復興への挑戦】に沿って県が選定した約170点を展示。3月に約30点を追加した。
- 県が行う常設展示の拡充と合わせ、3月24日から企画展示室を活用した特別展示を開催し、約40点の資料を企画展示室に展示した。
- 報道機関とタイアップし、震災関連の写真展を開催した。（令和3年2月17日～令和3年3月29日）
 - 読売新聞写真部・福島民友新聞「3.11あの日からの10年」
 - 福島民報社「いきいきふるさと&震災10年の歩み」

(2) 移動展示

福島市からの要請を受けて、福島市旧中合において「移動展示」を実施した。

- ・日時：令和2年12月15日～令和3年2月28日
- ・場所：福島市旧中合

3. 資料収集・保存・収蔵

(1) 資料収集

- 震災関連資料の収集、保存業務について、福島県が福島大学へ委託して収集・整理した資料約24万点を引き継いだ。
- 自治体や学校、企業、個人等から約2万5千点の資料を収集した。
- 資料収集では屋内外の写真撮影をして記録し、収集した資料は、燻蒸処理、一部写真撮影、データ整理までを実施した。
- 仮収蔵庫（旧県立小高商業高校）から当館収蔵庫へ資料を搬入した。

4. 語り部

(1) 館内語り部講話

開館日の午前・午後、それぞれ2回講演を実施した。

- ・開催実績：602回、約690人が聴講
- ・登録語り部数：29名（令和2年度）
- ・館内語り部育成研修：3回実施

5. 研修

(1) 一般研修

展示見学に加えて、被災体験の語り部講話、ガイドとともに現地を巡るフィールドワーク、講師によるワークショップを組み合わせた研修事業を実施した（福島県観光物産交流協会との共同事業）。

【参加実績】73団体 3,531人

（学校関係：40団体 2,777人、その他団体：33団体 754人）

【実施内容】

- ・語り部講話（40分程度）
- ・フィールドワーク（請戸小⇒大平山霊園⇒双葉駅 60分程度）
- ・ワークショップ（研修の振り返り 60分程度）

(2) 専門研修

当館の上級研究員を中心に、復興や防災に関する専門研修のプログラムを検討。令和2年度は県内外の教員を対象にしたモニター研修を実施。教員研修のニーズの把握と具体的な研修プログラムへの反映について検討した。

【教員向けモニター研修の概要】

- ・日時：令和2年11月28～29日（1泊2日）
- ・参加者：県内教員8人、県外教員4人の計12人

6. 調査・研究

(1) 研究体制

令和2年4月1日付けで上級研究員（非常勤）3名を委嘱した。

- ・安田仲宏（福井大学教授）
- ・関谷直也（東京大学准教授）
- ・開沼 博（立命館大学准教授）

(2) 調査・研究事業座談会

館長、上級研究員による座談会を開催し、今後の研究方針や研究内容を検討した。

- ・日時：令和3年3月1日
- ・場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 研修室

(3) 研究成果発表会

上級研究員3名が研究成果を発表した。

- ・日時：令和3年3月13日

・場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 研修室

【発表テーマ】

安田研究員「研修等を通じた学びの場の創出の重要性について」

開沼研究員「真の復興とは？社会関係資本が維持されにくい現実について」

関谷研究員「情報発信の難しさ、課題の個別性について共通理解の進まない現実」

7. イベント・広報

(1) イベント

ア. オープニングイベント

東日本大震災・原子力災害伝承館、双葉町産業交流センター、福島県復興祈念公園の合同開所式と合わせて、オープニングイベントを開催した。復興の先駆けとして開館を広く周知するとともに、双葉町と連携して地域活動団体による太鼓や演舞等のステージ発表などを実施した。

・日時：令和2年11月17日

・イベント内容：

【トークセッション】

テーマ「震災と原発事故から10年を振り返る。この記録と記憶を、教訓へ」

登壇者：武内敏英元大熊町教育長、高村昇館長、関谷直也上級研究員

【地域活動団体ライブステージ】

場所：双葉町産業交流センター イベント広場

内容：標葉せんだん太鼓、檜葉天神龍舞、浪江町相馬流山踊りなど

【地域伝統文化・資源体験イベント】

場所：伝承館 2階企画展示室

内容：甲冑着付け体験、大堀相馬焼・双葉ダルマ絵付け体験

【その他】

VR体験、ドローン操縦体験、語り部講話、フィールドワーク体験

イ. メモリアルイベント

震災から10年が経つことから、「東日本大震災・原子力災害から10年記録と記憶を後世へ」をテーマに数日に分けてメモリアルイベントを開催した。

① メインイベント（令和3年3月6日）

【基調講演】「福島県における東日本大震災・原子力災害伝承館の意義と役割」
講師：小沢喜仁特任教授（福島大学）

【活動報告とトークセッション】（2部構成）

・テーマ：「震災の記憶と記録を後世に引き継ぐ」

・進行：福島大学環境放射能研究所 難波謙二所長

・第1部参加者：富岡町3.11を語る会 青木淑子氏、大熊町教委職員、伝承館職員

・第2部参加者：福島民報社 鞍田炎氏、福島民友新聞社 小野広司氏、
県文化スポーツ局 野地局長

【演劇】ふたば未来学園高等学校

【オンライントークセッション】

岩手津波伝承館、長崎平和祈念館、広島平和祈念館と伝承館をオンラインでつなぎ、各館の館長または副館長が参加した。

- ② 被災町村首長経験者による特別講演
 - ・松本允秀前葛尾村長（令和3年3月3日）
 - ・渡辺利綱前大熊町長（令和3年3月7日）
 - ・菅野典雄前飯館村長（令和3年3月14日）
- ③ 追悼イベント（相双地方振興局、公益財団法人 LOVEFORNIPPON との共催）
 - ・大凧あげ、キャンドルナイト（令和3年3月10日）
 - ・ピアノ生演奏、キャンドルナイト（令和3年3月11日）
- ④ 伝承館研究成果発表会（令和3年3月13日）〈再掲〉
 - ・上級研究員3名による研究成果発表

（2）広報

ア．広報活動

- 効果的に伝承館開館をPRするため、報道関係者を対象とした内覧会を開催するとともに、報道機関に対し積極的に情報提供を行った。
- 開館やイベント開催に合わせ、テレビCMや新聞広告、ウェブ広告、SNS、鉄道広告及び雑誌掲載等で伝承館の意義や活動内容を積極的かつ効果的に情報発信した。
- 伝承館専用ホームページを開設し、各種イベントや語り部口演、研修等の事業についてきめ細やかに情報発信するとともに、多言語に対応させるなど幅広い層への情報発信に努めた。
- 館内展示物の説明等を加えた施設案内リーフレット（日本語、英語版）を作成し、広報及び来館者案内の充実に活用した。

イ．宣伝・営業活動

- 生徒・学生等を始めとする団体客の増加を図るため、県立高校や県内市町村教育委員会に対して伝承館への教育旅行実施を要請するとともに、公共交通機関や旅行代理店に団体旅行の催行を働きかけた。

【訪問実績】

- ・県立高校等 105校
- ・教育委員会等 14箇所
- ・民間企業（旅行代理店等） 89箇所
- ・その他 10箇所
- 教育旅行担当教員を対象としたモニターツアーを実施し、今後の団体客誘致に取り組んだ。
 - ・教育関係者モニターツアー（令和3年1～2月開催、25名参加）
 - ・旅行関係者モニターツアー（3月に開催を予定したがコロナの影響で中止）

8. 有識者懇談会

館のより良い管理運営と良質なサービスの提供を図るため、地元及び各分野の専門的な見地からの意見や助言を得ることを目的として「東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会有識者懇談会」（以下「懇談会」という。）を設置し、令和3年3月19日に第1回の会議を開催した。当館の運営等について様々な立場からの意見や提案を得た。

懇談会委員構成（令和3年3月現在）

所属・役職	氏名	備考
福島大学共生システム理工学類 特任教授	小沢 喜仁	学識経験者
福島大学教育推進機構 特任准教授	前川 直哉	学識経験者
双葉町長	伊澤 史朗	地元代表
NPO法人富岡町 3.11 を語る会 代表	青木 淑子	地元代表
福島県教育委員会教育次長	鈴木 芳人	教育関係者
福島県観光物産交流協会理事長	高荒 昌展	教育旅行/研修関係者
福島民報社いわき支社長兼浜通り創生局長	鞍田 炎	その他（報道）
福島民友新聞社編集局長	小野 広司	その他（報道）
広野町起業型地域おこし協力隊	大場 美奈	地元代表

令和3年度

1. 利用者状況

(1) 来館者数

令和3年度実績：58,271人（団体23,293人、個人34,978人）

※累計（令和2年度から）：102,021人（団体33,390人 個人68,631人）

(2) V I P等の視察対応

政府、自治体、海外など様々な要人が当館を視察した。

- ・政府関係者 19件 135人
- ・海外要人 10件 110人
- ・自治体関係者 23件 186人
- ・その他（民間企業幹部等）31件 268人

※随行者を含む。

2. 展示

(1) 展示更新

- 「福島・国際研究産業都市（イノベーション・コースト）構想研究会」座長として、構想研究会報告書を取りまとめた、赤羽一嘉・元国土交通大臣（元原子力災害現地対策本部長）による、当時の証言映像資料を追加した。
- 実物展示として、福島ロボットテストフィールドで飛行試験を繰り返したテトラ・アビエーション株式会社の「空飛ぶクルマ（Mk-3）」と第5回廃炉ロボコンで文部科学大臣賞（最優秀賞）を受賞した福島高専のロボット「メヒカリ」を追加した。
- プロローグシアター映像の外国語音声（英・中・韓）を改修した。
- 常設展示映像のうち4本に英語字幕を追加した。
- 屋外に展示している双葉町の原子力広報パネルを長期保全の観点から、レプリカの展示に変更した。

(2) 企画展

ア. 双葉町特集展「東日本大震災・原子力災害 双葉町の記憶と記録」

- ・日時：令和3年7月14日～8月30日
- ・場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展示室

地域と深く連携していくという方針のもと、一つの自治体に絞った初の企画展を開催した。また、期間中に町職員及び学芸員による解説や映画上映会等を実施した。

イ. 絵本企画展「絵本から学ぶ 子どもに伝える大震災」

- ・日時：令和3年10月9日～11月8日
- ・場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展示室

伝承館アテンダントが協力して発行した絵本や双葉ばら園に関する絵本の他、震災関連の絵本約 140 冊を展示し、親子で震災を考える機会を創出した。また、11月3日は、絵本作家等による対談を行い、絵本の魅力、親子のコミュニケーションツールとしての役割、震災伝承における可能性等について意見交換を行った。

ウ. 大熊町特集展「東日本大震災・原子力災害 大熊町の歩みとゆくえ」

・日時：令和4年3月4日～5月9日

・場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 企画展示室

大熊町原発誘致以前の土地利用から、復興に向けて進む町の取組みなどについて展示。3月中の土日祝日には「じじい部隊」と町職員が展示の解説や震災後の経験・想いを話すイベントを開催した。

(3) 出張展示

ア. 秋田出張展示

・日時：令和3年4月29日～5月26日

・場所：イオン秋田中央店（秋田県秋田市）

イオン秋田中央店にて、伝承館として初めて県外での展示を行った。来場者は約1,000人。

イ. 長崎特別展

・日時：令和3年12月3日～12月19日

・場所：国立長崎原爆死没者平和祈念館（長崎県長崎市）

国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館にて特別展を実施した。合わせて福島と長崎の語り部の交流を実施し、語り継ぐことの大切さについて意見交換するなど、伝承館として初めて県外での語り部活動となった。来場者数は約680人で、語り部交流活動には71人が参加した。

(4) エントランス展示（パネル展示）

ア. 伝承館連動企画「浪江町の学校と震災」

・日時：令和3年10月15日～

震災遺構「浪江町立請戸小学校」の開館に合わせて、震災前後の請戸地区の様子や、原子力災害の影響で閉校となった浪江町の学校の様子を伝えるなど、複合災害が地域に及ぼす影響の一面に焦点を当てた展示を行った。また、請戸小学校に残されていたピアノの展示を11月10日より開始した。

イ. J ヴィレッジパネル展

・日時：令和3年10月18日～11月29日

伝承館として初めて他施設と連携。伝承館では、J ヴィレッジにおける原発事故後の対応の記録パネルや、サイン入りのサッカー日本代表のユニフォーム等を展示。J ヴィレッジでは伝承館提供による震災と原子力災害の事実を伝えるパネルを展示した。

ウ. 「映画『家路』でみる あのとき これから」パネル展

・日時：令和3年12月16日～令和4年1月31日

2014年に撮影され、公開された映画「家路」をテーマとしたパネル展を実施した。久保田監督が2021年に当時のロケ地を再度巡って撮影した映像や、農業指導を担当した秋元氏（川内村）の2011年からの川内村における米作りの記録も合わせて展示した。

エ. 長崎原爆・平和展

・日時：令和4年3月5日～3月21日

広域的な施設間連携としてミニ展示を開催。東日本大震災時の福島と長崎との関わりを示す写真パネルや、長崎平和推進協会所有の原爆関連の写真パネルを展示した。

(5) その他

ア. アバターによる館内見学

民間企業（ANA あきんど）と連携してロボットを用いた遠隔展示館覧を試験的に実施した。観覧者は自宅から「アバター」と呼ばれるロボットを操作し、伝承館学芸員の案内で常設展示室内の一部を観覧した。

3. 資料収集・保存・収蔵

(1) 資料収集

東日本大震災及び原子力災害に関連する資料、約3,700点を収集した。

【主な収集資料】

・中間貯蔵施設輸送トラックのゼッケン、浪江町立請戸小学校のピアノ、檜葉町津波漂着物、小高産業技術高校開校記念式典関連資料など

(2) 資料の活用

伝承館が所蔵する資料や震災関連パネルの貸し出しを行った。

・九州電力佐賀支店（写真パネル、川内村の防災無線等）
・檜葉町役場（檜葉北小学校資料）

(3) 資料閲覧室

伝承館が所蔵する図書約1,200冊を閲覧できる「資料閲覧室」を令和4年1月にオープンした。（震災関連の図書、各自治体の震災記録誌や広報誌、絵本展で展示した絵本など）

(4) その他

博物館実習（1名）、社会教育実習生（1名）を受入れた。

4. 語り部

(1) 館内語り部講話

開館日の午前・午後、それぞれ2回講演を実施した。

・開催実績：1,212回、約5,300名が聴講。

- ・登録語り部数：32名（令和3年度）
- ・語り部育成研修：1回実施（新型コロナウイルスの影響により2回目を中止）

5. 研修

（1）一般研修

展示見学に加えて、被災体験の語り部講話やガイドとともに現地を巡るフィールドワーク、講師によるワークショップを組み合わせた研修事業を実施（福島県観光物産交流協会との共同事業）。

【参加実績】163団体 9,331人

（学校関係：100団体 7,778人、その他団体：63団体 1,553人）

【実施内容】

- ・語り部講話（40分程度）
- ・フィールドワーク（請戸小⇒大平山霊園⇒双葉駅 60分程度）
- ・ワークショップ（研修の振り返り 60分程度）

（2）専門研修

復興や防災に関する専門研修プログラムを令和4年度から運用することを目指し、実施内容の検討を行った。

令和3年度は、一般研修と館長及び上級研究員による専門講座を組み合わせたプログラムを6回実施し、参加者ニーズの把握及びプログラム内容を検討した。

【実施例】

- 10月23日「放射線被ばくとリスクコミュニケーション」 高校生 27名参加
- 10月31日「放射線と原子力防災」 高校生 35名参加
- 11月20日「東日本大震災と原子力災害の伝承」 大学生等 27名参加
- 12月6日「震災関連学習の指導法研修」 県内教員 37名参加

6. 調査・研究

（1）研究員の取組

館長及び上級研究員（非常勤）が各研究テーマに基づき、客員研究員で構成される研究班を形成し、研究活動を実施した。また、客員研究員24名を委嘱した。

【研究テーマ】

- ・高村館長：福島環境と人をつなぎ、伝える
- ・安田上級研究員：原子力災害下住民防護行動における対策の総合的検証
- ・関谷上級研究員：東日本大震災から10年の記録収集、基本統計・データベースの作成、研究集成
- ・開沼上級研究員：被災・復興の過程・課題の全体像を洗い出す

（2）調査・研究部門活動報告会

館長及び上級研究員の研究班による調査・研究の活動報告を行った。

- ・日時：令和4年3月12日

- ・場所：東日本大震災・原子力災害伝承館 研修室

【発表テーマ】

- ・高村館長 「福島環境と人をつなぎ、伝える」
- ・安田研究員 「これまでの放射線防護対策のふり返し、現在、そして未来に」
- ・関谷研究員 「原子力災害の調査研究」
- ・開沼研究員 「消えゆく記憶・記録のアーカイブはいかに可能か」

7. イベント・広報

(1) イベント

ア. セタイベント

- ・日時：令和3年6月17日～7月15日
- ・場所：伝承館1階エントランスホール

地域交流の場を創出し、伝承館を身近に感じてもらうことを目指し開催。双葉町^{もろたけ}両竹地区で採取した竹を館内に設置し、来館者や双葉郡内の小・中学生が、震災や復興への想い、それぞれの願いを書いた短冊を飾った。

イ. 学芸員解説イベント「親子で学ぶ・伝える東日本大震災・原子力災害」

- ・日時：令和3年8月14日
- ・場所：伝承館展示室ほか

参加した親子と常設展示の各ゾーンを回り、展示物の解説などを行った。

ウ. 震災の記憶の風化防止に向けたイベント「あの日からの経験をふくしまの未来へ」

- ・日時：令和3年11月6日
- ・場所：伝承館

震災の記憶や教訓、復興に向けた取組みについて、幅広い世代に発信するイベントを開催した。参加者約350名

【イベント内容】

- ・トークセッション「相双地区だからできること」
相双地区で活躍する企業代表、ふたば未来学園生徒ら4名による、地域の未来について意見交換
- ・「3.11の経験とこれからの地域づくり」
高村昇館長と辰巳琢郎氏（あったかふくしま観光交流大使）による被災地支援や「食」を通じた地域づくり活動等についてトーク
- ・その他のイベント
現地ツアー（伝承館周辺）、起震車体験、防災エンスショー、いちにち動物園、高校生マルシェなど

エ. 映画連携イベント「映画『家路』でみる あの時 これから」

- ・日時：令和3年12月16日～令和4年1月31日
- ・場所：伝承館

被災地住民の心情を描いた映画を通して、改めて震災直後の状況を振り返り、「あの時」と「これから」について考えるイベントを開催。

【イベント内容】

- ・オリジナル映画上映（令和4年1月15日）
- ・トークイベント（令和4年1月22日）

同映画の監督 久保田直氏と 川内村民 秋元美誉氏、高村館長による対談を実施ロケ地の撮影時と今の姿について当時を振り返りつつそれぞれの思いを語る

オ. メモリアルイベント「キオク／ツナグ／ミライ」

- ・日時：令和4年3月5日、11日、12日
- ・場所：伝承館

震災から11年。をテーマにメモリアルイベントを通じ、犠牲となった方々を悼み、震災の記憶や福島のことを発信することを目的にメモリアルイベントを開催。参加者は3日間で941名。

【イベント内容】

①トークセッション（3月5日）

第1部 テーマ「震災の経験を次世代へつなぐ」

- ・NPO法人 Jin 川村 博氏
- ・一般社団法人ふたばプロジェクト 山根光保子氏
- ・福島県立会津学鳳高等学校生

第2部 テーマ「福島と広島、長崎をつなぐ」

- ・国立広島原爆死没者追悼平和祈念館 館長 久保 雅之氏
- ・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 館長 高比良 則安氏
- ・東日本大震災・原子力災害伝承館 館長 高村 昇

ふたば未来学園高等学校演劇の放映

※新型コロナウイルスの影響により収録映像を上映

②追悼イベント：ピアノ演奏、箏演奏、追悼花火（3月11日）

③特別講演・活動報告（3月12日）

- ・特別講演「手探りの広域避難～全町避難の実態～」

浪江町元副町長 宮口 勝美氏

カ. 出張コミュタン at 伝承館

- ・日時：令和3年12月18日、19日
- ・場所：伝承館1階エントランスホール

放射線や福島の環境について学べる施設「コミュタン福島」と連携したイベントを開催した。

（2）広報

- 教育関係者向けのパンフレット「教育・研修旅行のご案内」を約2万部作成し、全国の旅行代理店等に発送した。
- イノベ機構交流促進部と連携し、360度カメラを活用したVR動画を作成。
- 伝承館のInstagram、Facebook を開設し、SNS を活用した情報発信を実施。

8. 有識者懇談会

館のより良い運営と良質なサービス提供を図るため、地元及び各分野の専門的な見地からの意見や助言を得ることを目的として、「東日本大震災・原子力災害伝承館の運営に関する有識者懇談会」（以下、「懇談会」という。）を設置している。

令和3年度は令和4年3月28日に開催し、館の運営等について様々な立場からの意見や提案をいただいた。

懇談会委員構成（令和4年3月現在）

所属・役職	氏名	備考
福島大学共生システム理工学類 特任教授	小沢 喜仁	学識経験者
福島大学教育推進機構 特任准教授	前川 直哉	学識経験者
双葉町長	伊澤 史朗	地元代表
NPO法人富岡町3.11を語る会 代表	青木 淑子	地元代表
福島県教育委員会教育次長	丹野 純一	教育関係者
福島県観光物産交流協会理事長	高荒 昌展	教育旅行/ 研修関係者
福島民報社浜通り創生局長	鞍田 炎	その他（報道）
福島民友新聞社編集局長	小野 広司	その他（報道）
広野町起業型地域おこし協力隊	大場 美奈	地元代表

東日本大震災・原子力災害伝承館 令和4年度 年次報告書

令和6年3月 発行

■発行 公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構
東日本大震災・原子力災害伝承館
〒979-1401 福島県双葉郡双葉町大字中野字高田 39
T E L : 0240-23-4402
F A X : 0240-23-4403
e-mail : archive@fipo.or.jp
W E B : <https://www.fipo.or.jp/lore/>

■印刷 株式会社山川印刷所

© The Fukushima Innovation Coast Promotion Organization 2024 Printed in Japan

*無断転載を禁じます。

公益財団法人福島イノベーション・コースト構想推進機構の取組みは
以下のURLからご覧いただけます。
<https://www.fipo.or.jp/>